

平成 21 年度岐阜市富山市都市間交流事業



越中と美濃 を結ぶ 考古展

交流のはじまり 旧石器時代～古代

記念講演録



富山市教育委員会埋蔵文化財センター

平成 21 年度岐阜市富山市都市間交流事業

越中と美濃
を結ぶ
考古展

交流のはじまり 旧石器時代～古代

記念講演録

富山市教育委員会埋蔵文化財センター

越中と美濃 を結ぶ 考古展

交流のはじまり 旧石器時代～古代

記念講演録

目次

富山市・岐阜市遺跡地図	3
富山市・岐阜市歴史年表	4
1. 記念講演録「越中・美濃 縄文のクニのすがた」 奈良文化財研究所名誉研究員 岡村 道雄	5
2. 記念講演録「古代社会の中央と地方－ 重要文化財美濃国刻印須恵器を中心に」 岐阜市歴史博物館館長 高木 洋	20
3. 特論「富山県における下呂石の搬入状況」 富山市埋蔵文化財センター所長 古川 知明	32
4. 記念講演録「木製品から見た弥生・古墳時代の東海と北陸」 首都大学東京准教授 山田 昌久	41
5. 記念講演録「北陸と東海の古代まじないの世界」 富山市教育委員会 堀沢 祐一	54
参考文献・奥付	64



番号	遺跡名	時期
1	打出遺跡	弥生
2	八町古墳群	古墳
3	百塚住吉遺跡	縄文
4	小竹古墳	古墳
5	高向八町遺跡	古墳
6	百塚遺跡	縄文
7	高小茶屋遺跡	縄文
8	真田モグラ池遺跡	古代
9	北沢遺跡	旧石器-縄文
10	高田杉林遺跡	古代
11	神中山樫六墓群	古墳
12	金峯第一古墳群	古代
13	古川遺跡	縄文
14	新古南遺跡	縄文
15	吉沢A遺跡	旧石器-縄文
16	吉沢遺跡	旧石器
17	境野遺跡	古代
18	向野池遺跡	縄文
19	関ヶ長中山古墳群	古墳
20	関ヶ長中山古墳群	古墳
21	吉沢塚山古墳群	古墳
22	真山山丘古墳群	古墳
23	倉屋敷の穴塚六墓群	古墳
24	杉谷4号墳	弥生
25	杉谷A遺跡	弥生
26	明神遺跡	古代
27	関ヶ長中遺跡	古代
28	王塚古墳	古墳
29	助塚遺跡	古墳
30	向野塚墓群	弥生
31	千切山遺跡	弥生
32	穴塚古墳群	弥生
33	鏡池町遺跡	弥生
34	高沢遺跡	旧石器
35	磯貝遺跡	縄文
36	鏡塚墓群	弥生
37	高崎墳墓群	弥生
38	高崎一前古墳群	弥生
39	坂本第1遺跡	弥生
40	真山遺跡	縄文
41	鏡池遺跡	古墳
42	佐海宮田遺跡	古代
43	緒力遺跡	弥生
44	野上遺跡	旧石器
45	八木山穴野遺跡	旧石器-縄文
46	春日遺跡	縄文
47	直取日遺跡	旧石器-縄文
48	直取遺跡(直取I遺跡)	旧石器-縄文
49	布尻遺跡	縄文
50	東地町上野遺跡(A地区)	縄文
51	文徳寺細田遺跡	縄文
52	米田大塚遺跡	古代
53	曹田大塚・中西原遺跡	古代
54	宮町遺跡	古代
55	黒黒野野田・平塚遺跡	縄文
56	水嶋野田・辻ヶ塚遺跡	古代
57	水嶋野田・中風崎遺跡	縄文
58	清水家西遺跡	弥生



番号	遺跡名	時期
1	佐野遺跡	縄文
2	秋山遺跡	縄文
3	秋山古墳群	古墳
4	宇田遺跡	古墳-古代
5	御室古墳群	古墳
6	御室遺跡	縄文-弥生
7	船山山古墳群	古墳
8	下西郷一本松遺跡	古墳
9	神倉遺跡	旧石器-縄文
10	樽原古墳群	古墳
11	上畑田寺古墳群	古墳
12	坂野古墳群	古墳
13	藤塚古墳	古墳
14	藤塚遺跡	古墳
15	藤塚古墳群	古墳
16	八代遺跡	古墳-中世
17	岩崎第2古墳群	古墳
18	西山古墳群	古墳
19	鷺山古墳群	古墳
20	西野古墳群	縄文-弥生
21	藤原古墳群	古墳
22	真山古墳群	古墳-中世
23	真山古墳群	縄文-縄文
24	真山古墳群	古代
25	真山古墳群	古代
26	藤塚古墳	古代
27	大塚寺	古代
28	藤原遺跡	弥生
29	厚良寺跡	古代
30	福龍寺山山遺跡	弥生
31	厚良寺跡	弥生
32	梅林小学校遺跡	弥生
33	藤ヶ古遺跡	弥生
34	藤原遺跡	弥生
35	藤原小学校遺跡	弥生
36	折年町遺跡	弥生
37	宇田遺跡	弥生
38	六条遺跡	弥生-中世
39	江原遺跡	弥生
40	日野第1古墳群	古墳
41	寺田遺跡	旧石器-弥生
42	日野遺跡	旧石器-古墳
43	寺田遺跡	旧石器
44	等塚北遺跡	旧石器-中世
45	等塚古墳	古墳
46	等塚古墳群	旧石器-縄文
47	岩田塚古墳群	古墳
48	芹見町遺跡	古代-中世
49	岩田第A・B遺跡	弥生-中世
50	岩田古墳	古墳
51	老鳥塚古墳群	古代
52	岩田古墳群	古代
53	岩田古墳群	古墳
54	法花寺古墳群	旧石器
55	岩田第A・B・C遺跡	旧石器-中世
56	岩田古墳群	古墳
57	大塚古墳群	古墳
58	藤塚古墳群	古墳

越中・美濃

縄文のクニのすがた

Michio Okamura 岡村道雄

東北大学大学院修了、東北大学助手・東北歴史資料館・文化庁文化財部記念物課・奈良文化財研究所を経て、現在奈良文化財研究所名誉研究員、宮城県東松島市奥松島縄文村歴史資料館名誉館長、文化庁記念物課調査員。研究テーマは、日本の旧石器時代から縄文時代、埋蔵文化財行政。縄文時代の本質を精神文化や漆工などの技術から解明すること。



小竹貝塚出土 鹿角製装飾品

はじめに

おはようございます。岡村道雄です。昨日富山に参りましたところ、ちょうど北代遺跡の史跡公園オープン 10 周年のイベントが開催されておりました。そこで北海道ほくわい 鶴岡町のアイヌの方達が、広場で古式舞踊こしきぶようを披露されました。病気を治す時の呪文やコーカラなど迫力のある伝統的芸能を見せて頂いて、私は大変感動しました。

この北代遺跡は、史跡整備事業で縄文時代の土屋根の竪穴住居たてあなじゅうきょのムラが、復元されています（写真 1）。土屋根の竪穴住居は、小さな築山みみたいな外観の家です。日本人は、このような土屋根の家に、少なくとも 10,000 年前から 1000 年ほど前まで住んでいました。



写真 1. 土屋根の竪穴住居（史跡北代遺跡）

日本書紀や古事記には、「土蜘蛛つちぐも」という言葉がでています。大和朝廷

が小山のような土屋根の家に住んでいた先住民族を「土の中に住む蜘蛛のようだ」と表現したものののですが、そのことから日本人は土屋根の竪穴住居に長く住んでいたと考えられます。

さてこの竪穴住居という言葉ですが、今後使われなくなるかもしれません。今、奈良文化財研究所では「発掘調査のてびき」を作っています。この 40 年間に全国で行われたたくさんの発掘調査で積み重ねたノウハウを踏まえて、標準的な発掘方法をまとめています。その手引で従来使ってきた「竪穴住居」という用語を「竪穴建物」という表現で統一することになりました。

「竪穴建物」って、非常に聞き慣れない用語かも知れません。「竪穴住居とどこが違うの」と言われると思うのですが、「掘立柱建物ほったてはしら」が建物というのに対して「竪穴住居」というのは、おかしい。建物の形式として「竪穴」と呼び、「住居」でない竪穴も含むはずだから、「竪穴建物」と呼ぶのが適当ではないかということです。

その他にも色々な用語を統一して手引きを作っていますが、これから国の印刷物や教科書で「竪穴建物」という表現になるかどうか。これまで相当「竪穴住居」という用語で慣れてきましたし、変えるとかえって混乱するのかなという気もします。

焼失竪穴建物について

縄文時代から弥生時代にはその竪穴建物を焼く習俗があります。どうして建物を焼

いたのかという強い疑問があります。結論的には、土屋根の頑丈な建物を解体するために、燃やして解体したのだと思います。燃やされた竪穴建物は、中の柱、梁や垂木が木炭状態になってよく残ってくれるので、その配列から上部構造がよく分かります。

古い時代の建物というのは構造がなかなか分かりません。飛鳥・奈良時代からはわずかですが現存する建物が(注1)ありますので、それらをもとに復元しています。しかし、それ以前の古い時代となると現存していないので、全くお手上げです。竪穴建物についても地下に残った竪穴の輪郭ぐらいしか分からないのです。ただ



写真2. 焼かれた竪穴建物 (打出遺跡)

し、これが焼かれて見つかったと、炭化した柱・垂木材などの位置から構造が確認できるのです。富山市は焼かれた建物がかんたんにたくさん出る地域で、打出遺跡からも焼かれた竪穴建物が見つかっています(写真2)。これからこの地域で期待できる研究分野ではないかと思います。

考古学のあり方について

このように考古学は本来、出土したモノに基づいて証立てて考察するのです。しかし、人間は年を取るとだんだんいい加減になります。「まあいいか」という感じで、既成の知識や想像で物事を言うようになります。考古学は、きっちり自分の目で見て、正確に発掘し、図面にとって、分析し、研究する学問です。昔はそういう細かな作業をすべて自分でして、積み上げてきました。しかし、近年では調査量が増加し、若い調査員たちは、発掘し、報告書にまとめることで毎日が精一杯という現状です。それで近年では、作業が役割分担されてきましたし、パターン化された記載と個性のない結語になる傾向が見られます。

このような考古学全般に見られる傾向やバブル考古学的背景が招いたのが、あの旧石器遺跡捏造事件です。忘れもしない2000年11月5日。捏造が発覚して毎日新聞の一面に出た日です。今年2009年です、あれから10年経とうとしています。そろそろきちんと総括しないと考古学の本当の信頼回復には至らないのではないかと思います。今、私の残り少ない人生を考古学の信頼回復に向けて、どうしたらいいかと日々考えております。

なぜ、ああいう事件が起きたのか。なぜ間違った成果が教科書に載るまでになっ

てしまったのか。不確かな事実を発信して普及してしまいました。初期には一緒に発掘していて捏造に気がつきませんでしたし、文化庁に移ってからは誤った成果を普及し、結果的に大きな御迷惑を掛けた責任は大きく、まことに申し訳なく思っております。その辺のことを私が本にまとめて総括し、将来の教訓にしたいと思っています。

漆について

私の研究テーマの一つに「漆」があります。日本の漆は、縄文時代のみならず日本文化の一つの大きな原点として世界に誇れる文化です。

縄文時代では定住が確立した時からムラ周辺にウルシ林を育てています。ウルシは、基本的に栽培してやらないといけない木で、野生のウルシの木はないと言われています。日本に原生のウルシの木はないのです。もし、原生のウルシの木があるのをご存知でしたら、ぜひ教えてほしいです。

私は、ウルシの木が日本にも大昔からあり、それを縄文人が定住した時に自分の身の周りに移植して栽培管理し、漆の液を採り漆塗りを行った、というふう考えています。北海道函館市（旧南茅部町）の垣ノ島B遺跡に9500年前の年代が出ている漆製品があります。今世界で一番古いものです。漆文化は中国から来たと言われていますが、中国では遡っても約7000年前です。日本は漆の利用が始まった時から、相当しっかりした漆製品を作っています。

昨日アイヌの人たちにも色々お話を聞いたのですが、アイヌの人たちは衣服やヘアバンドにアイヌ文様を刺繍するのだそうです。北海道では9500年前から衣服や首飾りなどの繊維製品に、漆を塗ったものが見つかっています。現代の漆器のように容器に漆を塗るようになるのは、6000年前ぐらいからで、それより以前は繊維製品に漆を塗ったものが主流です。

縄文時代の衣類は基本的に編んだもので、カラムシやアサノなどの細い繊維で1mmほどの糸を撚り、漆を染み込ませて編み上げていきます。ムシロ作りと同じで、それが衣服になります。漆が使われた繊維製品は日本だけで、北海道では9500年前から6000年、5000年前という時期に流行り、墓にはそのような装束をつけた人たちが埋葬されています。

本州で漆文化が始まるのは6000年前で、縄文時代前期の福井県若狭町の鳥浜貝塚はその代表です。縄文時代中期になると全国的に漆の使用は下火になるのですが、北陸から琵琶湖の周辺は漆をよく使用しています。遠く北海道では使用が減っているのにこちらは多い。そういう点も非常に面白いのです。

日本は木と植物繊維の文化です。縄文という名が示すように、繊維製品、編組製品、

木の皮を使った樹皮製品がたくさんあります。そして、これに漆が塗られると漆製品になります。漆は紫外線には若干弱いのですが、後は万能製品です。塗られた漆が有機質の腐食をガードし、腐りにくくなります。だから、漆製品は割合良く残るのですが、低湿地遺跡から出土した漆製品は木胎の部分までよく残ってくれます。

また、今、民俗資料として残っている編組製品、ざるやかごの編み組み方は全て縄文時代まで遡れます。むつめ編みやあじろ編み、かごめ編みなどの製品が佐賀市の東名遺跡から見つかっています。東名遺跡には、アカホヤ火山灰の下から見つかった7000年前の縄文時代早期の低湿地性貝塚があり、調整池を造る工事で見つかりました。佐賀平野の潟の下に遺跡があるなんて思いもしませんでしたので、みんなビックリしました。

貝塚遺跡について

このように私達は、出土したものを調べて縄文時代の文化や生活を復元しますが、普通の遺跡からは土器と石器しか出てきません。しかし、貝塚ではそれ以外に骨や貝がたくさん残っています。日本の国土の95%は酸性土壌なので有機物は腐ってしまいます。ところが、貝塚では貝のカルシウム分が土壌の性質を中和状態に保ち、数少ない中性からややアルカリ性の状態なので貝や骨が良く残ってくれるのです。

また、加曾利貝塚（千葉市）や大森貝塚（東京都品川区、大田区）など、台地の上にある乾燥した所の貝塚では木製品などの有機物は残らないですが、低湿地の貝塚では土のペーパー状態に加え、比較的湿度が低い状況下で遺物が水浸けになり、酸素の供給が遮られ腐食が妨げられるため、有機物ですが木製品も残りやすいのです。

この富山県・石川県辺り、それから新潟県もそうですが、北陸・日本海側にも潟や河岸の下に縄文時代早期、今から7000年ぐらい前の古い時代の遺跡がまだ相当埋もれている予感があります。小竹貝塚に近い富山の放生津潟も、同じような状況だと思えます。

富山市小竹貝塚について

今回展示されている小竹貝塚の出土品（写真3）を見ると、私は鳥浜貝塚に匹敵する、ひよっとすると鳥浜貝塚を越える貝塚ではないかと感じます。これは私が長年遺跡を見てきた予感でもあります。新幹線工事に関連して富山県埋蔵文化財調査財団が行った確認調査では、堅穴建物がたくさん見つかっています。この時期のムラは居住域と貝塚と墓域がセットになるのですが、小竹貝塚は貝塚部分だけでも相当大きく、ムラも相当大きく広がりそうな気がします。埋葬人骨も出ていますから、墓場も

あります。

また、低湿地にありますので漆製品や繊維製品などが腐らないで残っている可能性が非常に高い。最近石川県の真臨遺跡の発掘調査で、底板が敷かれた木棺がしっかり残った墓の中から、漆塗りの飾り物が出土しました。小竹貝塚にもそのような可能性が十分あるので、この辺の興味も含めて出土品を見て下さい。

小竹貝塚からは犬の骨（写真4）がたくさん出ております。日本では、大陸から犬を食べる習慣が弥生時代に入ってきて、犬を食べ始めています。他にもオホーツクの住民は、盛んに犬を食べます。弥生時代以降、日本人はずっと犬を食べてきたのです。江戸時代

の城や武家屋敷などのゴミ穴を掘ると犬の骨が散乱していて、刃物傷のある骨が出てきます。しかし、縄文人だけは犬を食べていません。だから、小竹貝塚の犬の骨は埋葬されたものです。小竹貝塚のムラには犬がいっぱいて、人々は犬と共に住んで、犬を狩猟に使っていたのだと思います。

また、縄文人は栽培もしていました。先ほどウルシの木の話をしましたが、ウルシの栽培だけではなく、豆類の栽培もしていました。この頃では遺跡を掘れば、当たり前になってきているぐらい豆類が出てきます。それからヒヨウタン、エゴマ、ホオズキやゴボウなども栽培しています。栽培規模は家庭菜園程度と推測されますが、栽培されていた種類はこれまでの調査でずいぶん増えてきています。

そして家畜としては狩猟のパートナーとして犬を飼い、一部ではイノシシの飼育も始めていました。そして、縄文人は栽培や牧畜をもっと進めることが技術的に可能だっ



写真 3. 小竹貝塚出土遺物

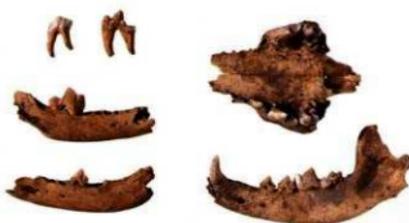


写真 4. 小竹貝塚出土犬骨

たと思います。しかし、自然を自分達の都合の良いように変えることをしないで、自然との良い関係を作り管理し育てていくという生き方だったようです。

このように小竹貝塚は縄文人の暮らし方、生き方が分かる貴重な後世に繋がる遺跡です。この地域には縄文時代前期に小竹貝塚や蛭ヶ森貝塚があり、中期になると台地の上に北代遺跡や開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡が営まれ、いくつかの遺跡が固まりになって小さなエリアを作っています。あの地域のムラとムラとの繋がり、あるいはムラの変遷、つまり地域の人たちの祖先があそこに住み着いて今日に至るまでの一つの集団の軌跡が辿れるところとして非常に興味深く思いました。小竹貝塚のような遺跡はこれからも大切にしてほしいものです。

縄文時代の環状集落

今回の展示には開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡の縄文土器や琥珀玉（写真5）も展示されています。開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡は縄文時代中期の典型的な環状集落（写真6）です。

環状集落とは基本的には、中央に広場という空間があり、広場の周囲には墓があり、さらにそれを取り囲むように堅穴建物や掘立柱建物が分在し、外側にゴミ捨て場があるという構造になります。ゴミ捨て場が、貝塚になっていると環状貝塚です。

場合によっては、さらに外側に貯蔵穴があります。地下貯蔵穴です。つい最近までも家庭で穴を掘って大根や芋を貯蔵していました。土に穴を掘ると、冬は凍らず夏は涼しい。実験しますと、地下の穴の内部はだいたい年間18度前後に保たれ、貯蔵に適していました。場合によっては、貯蔵穴の中に土器があり、中に貝殻が入っていたりします。棚が作られて、上手く立体的に使っていた場合もあります。

居住の長さによって、墓や堅穴建物の数が決まってきます。墓はグループを成すことが多く、それは居住者の世帯を反映したものだと思います。また、縄文時代前期・



写真5. 開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡出土琥珀玉



写真6. 開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡の環状集落

中期に、墓は集落の中央の広場に造られています。現代の感覚としては、集落の真ん中に墓があるのは奇妙ですが、当時の人々は霊を中心に日々の生活を送り、祖霊と一体の日常生活を送っていたと考えられます。

このような環状集落は「縄文モデルムラ」と呼ばれていますが、それは関東・中部・北陸地方の特徴であることが分かってきました。

三内丸山遺跡(写真7)など東北・北海道の縄文時代前期・中期の円筒土器文化圏には環状集落はありません。尾根上を通る道を中心に、竪穴建物が二列縦列で並んでおり、同時期の関東・中部・北陸とは全然集落景観が違います。

三内丸山遺跡の発掘現場に最初入ったときには、「このムラの構造がどうなのか、全然理解できない、どこがどうなっているんだろう。」と思いました。環状集落ばかりイメージしていたので、自分がそのムラの中のどこにいるのか分からなかった。発掘しているうちに、真ん中に道があり、その両脇に

墓があって、その向こうに住居が集まって、さらに向こうに貯蔵穴があるということがだんだん分かってきました。東北では今でもよく見られる集落形態です。ただし、大湯環状列石(写真8)など環状列石のある時期には、ムラの構造は列から環になるように、環状列石も基本的にムラではないかと思います。

だから環状集落が「縄文モデルムラ」というのではなく、地域ごとに固有なムラの構造や文化があり、それが社会構造にも表れていると見て良いと思います。

開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡から出土した琥珀玉は、関東・中部地域の西部に位置するこの地域性をよく表している遺物です。琥珀玉は、中央広場の墓から出てきています。1つの墓から出ているのか、他の墓からも出ているのが重要です。琥珀は墓穴に埋葬された人物の胸の辺りから出るのが、翡翠に比べて出土数が少ないのは劣



写真7. 三内丸山遺跡の復元集落



写真8. 大湯環状列石

化しやすいからでしょう。劣化しているので気を付けて掘らないと粉のようになり、壊れてしまいます。琥珀の玉は長野県岡谷市の梨久保遺跡でも出土しています。山梨県では甲斐原遺跡ほか数遺跡で、関東では一つの穴の中から数点が出土した例もあります。縄文中期の岐阜県高山市の丸山遺跡では、蜜玉みたいな琥珀が連珠になって出ています。

縄文中期の後半という時期は、階層化がかなり進んでいる時期です。階級のような上下の関係ではなく、例えば、私は狩猟が上手だとか、私は船を漕ぐのが上手だとか、そういう職能によるような階層差、あるいは年齢階層や男と女の階層です。琥珀や翡翠の玉は、リーダー階層の墓に入って発見されます。このような例は関東・中部の特色で、この辺は同じ文化圏と言えます。

文様の意味

縄文の社会の地域の集団のまとまりは、少し広い範囲で「私達は仲間です」というような同族意識を持った人たちだったと思います。

アイヌの方々には、ムラに「エカシ」（アイヌ語で「長老」という意味の尊称）という人がいて祭祀を司ったりします。ある一定範囲を司るようなエカシがいて、集落連合のお祭りをやります。エカシは明確な階級ではなく役割で、現在もそういう役割でムラにいて祭祀を司るのだそうです。縄文の原形を見るようです。

また、アイヌの人達はアイヌ文様という民族の共通の文様を持っています。アイヌはフクロウを自分たちの守り神にしているので、フクロウをイメージした文様があります。更に邪悪なものが入って来れないよう、色々な部分にトゲを表す模様を配します。そのような共通の守り文様を持っているのです。これはおそらく縄文時代も同じで、縄文土器の文様にも、そのようなイメージがあったと思われる。

縄文人は土器に単純に文様を付けているのではありません。遺跡ごとに文様が違うわけでもありません。遺跡の中で同じ文様は2つとないのですが、みな共通する文様もっています。たまに2つか3つ、全く同時に作ったと思われるような縄文土器もないわけではありませんが、基本的には全く同じや全く異なる文様はありません。要するに一定程度、地域ごとに原則となる文様を持っているのです。それは例えるとアイヌの基本文様と同じで、地域性や時代性を良く表しているのです。

それで岐阜と富山を繋ぐような文様はないのかと思って色々調べたのですが、残念ながら展示会場にはありませんでした。例えば縄文土器の型式で北陸の古府式と中部の中ノ沢式ですが、これらは波状口縁を持ち底が丸くなり、沈線が入る土器で、似ているように見えます。要するにアイヌの基本の文様と同様に、そっくりの土器を作る

地域というのがあるのです。これは「自分達の集団はこんな土器を作ろう」という約束事を持っていた地域で、おそらく共通する言葉で繋がる集団の領域を示しているのではないかと思っています。

北海道南部の渡島半島^{おしま}と津軽海峡^{つがる}、それから東北北部の地域には、津軽海峡を挟んだ縄文のクニと呼んでもいい文化領域があります。津軽海峡はもちろん歩いては渡れません。ブラキストン線という動植物の境界線があり、自然生態学や地形・地理を考えると、ここに共通の文化があるのは考えにくいわけです。

ところが、この地域では非環状の集落形態や土器の様相が共通しています、板状土偶^{ばんじょうどぐわ}という十字型の薄い板状で乳房もほとんどつけない土偶などの祭祀具を共通して作ります。円筒土器文化という、バケツのような円筒形の土器が、秋田県の北部、岩手県の北部から、青森県、北海道石狩低地まで分布しています。それから南へ行くと、円筒形ではなくなり、また、その両者折衷型^{せつちゆうがた}というものもありません。こうした地域的なまとまりが、先ほど述べた一定程度共通する集団の実体だと思われます。

この津軽海峡縄文のクニは「北海道・北東北の縄文遺跡群」として世界遺産の国内暫定リストに入っていて、あと5年先ぐらいにユネスコに申請するという段取りになっています。世界遺産に申請する時には、「縄文文化とは何か、人類共通の普遍的価値」などについて説明しなければいけません。これまでのように「縄文文化は狩猟・採集文化で、日本には縄文人がいて、縄文土器を使っていた」というような説明では通りません。排他的に「縄文文化にしかないものは何か」と問われても、ものすごく困ってしまいます。

それで、私は今年の1月の半ばに奄美大島^{あまみ}から徳之島^{とくのしま}に行き、その後沖縄本島の北から南へとずっと下りながら、縄文文化はどこで途切れるかと思いながら調べに行きました。民俗学の民具の分野では、徳之島で北からと南からの文化が錯綜^{さくそう}します。徳之島まで分布するものとしなないものがあり、だいたい徳之島周辺が境界になって、文化圏が設定されます。様々な民具の境界線が重なっているのが徳之島なのです。ところが、縄文文化要素の多くは、徳之島までには及んでいません。

道具という観点から縄文文化を考えてみると、石鏃^{せきざく}は外国にはありません。「いや、そんなことはない。朝鮮半島の南端にはあるんだ」という人がいると思います。しかし、それは、日本の石材で作った日本から運ばれた石鏃です。石匙もそうです。弥生時代になると石鏃はあるのですが、石匙^{いしざし}は残りません。

縄文土器も日本にしかないと言って良いでしょう。縄文土器は、多くの土器に縄文文様をつけたともいえます。また、世界の土器は口が平らで逆様に置いても安定しま

す。ところが、縄文土器はひっくり返せません。ひっくり返したらガタガタします。縄文土器の特徴は、波打つ口縁部＝波状口縁です。そういう目で見ていくと、沖縄本島でもごく一部、後期ぐらいの時に縄目が付けられた波状口縁の土器がありますが、わずかです。波状口縁で文様として縄を転がす土器が主体なのは鹿児島本島までです。また石畿も沖縄には、全島で数点ぐらいしかありません。石匙は北谷町伊礼原遺跡ちやたんちやういれいはるの1点しかありません。北部地域産のチャートを使っていますので、地元産は間違いないのですが、石畿も石匙も主体とは言えません。

そのような道具の種類とは別に、私は縄文文化を決定づける要素は、送り儀礼や祭祀の特色だと思います。貝塚は沖縄にもあるのですが、沖縄の貝塚は貝殻などの捨て場で、送り儀礼はやっていません。弥生時代になると環濠集落の濠の中にゴミをただ捨て、水飲み場や水洗い場にもなったりします。しかし、縄文時代はムラの一角に送り場を設定して、そこで送り儀礼をやります。よく「貝塚というのは、ゴミ捨て場ですか?」と聞かれます。現代風にいえばゴミ捨て場なのですが、縄文人は貝塚に人の遺体まで埋葬し送るのです。自分達に恵みを与えてくれた万物を祭りカミに送り返して、再来を願う。

人だけでなく獲物、採集物、道具などの万物に生命が宿ると考え、全てを神とし、感謝の気持ちを込めてあの世に送るという儀式です。アイヌの方も熊をあの世に祭り上げて返します。縄文人も同様な考えをもっていたようです。現代では、「どんど祭」、この辺では左義長（写真9）というそうですが、お正月が終わって、神



写真9.左義長

棚のものを下げて火に入れて送る、これも送り儀礼の名残りだと思います。

御物石器

さて、今回の展示を地域的な文化という視点で見ると、「御物石器」という奇妙な形で何に使ったか分からない石器（写真10）があります。岐阜と富山中心に分布しているものです。昔、皇室に献上したので「御物」という名前がつけられました。普通なら形や使い方、これは鎌だとか、斧おのだとかと呼びます。しかし、これはいつまで経っても機能が分からない。それでずっと御物石器と呼ばれてきました。

図1は橋本正さんはしもとただしの「御物石器論」という論文に掲載された図です。「御物石器論」は、今でも御物石器の基本的な論文だと思います。橋本さんは私より一つ年上の

人だったのですが、早くに亡くなりました。この地図には御物石器の出土地点が落としてあります。東海地方からはほとんど出ておらず、ほぼ岐阜・富山県に限定されています。石材には地元産石材の砂岩や粘板岩が使われています。

御物石器には基本的に使用痕はありませんが、墓に入れられた状態で出土したり、真脇遺跡で

は祭祀遺物と一緒に捨てられていたり、飛騨市宮川村家ノ下遺跡からは、墓穴の上に置かれた状態で見つかっています。このことから、御物石器は富山と岐阜一帯の地域に本来は限定されたマツリの道具で、在地の石材で作られ、この地域だけで共有されたものと考えられています。



写真 10. 御物石器 (春日遺跡)



図 1. 御物石器の型式別分布図
橋本正「御物石器論」『大境 6号』から転載

その前にこれがマツリの道具であるかないかという議論はしないといけません。当時の祭祀について具体的な様子は分かりませんが、考古学は何か分からない物があると、すぐに祭祀に逃げます。そういった悪口はみなさん十分にご存知だと思うのですが、逃げずに出土状況や、どんな分布図から出土しているかなどから実証的に意味を探っていきたいと思います。

御物石器は、最近大分県竹田市田井原遺跡^{たけだ たいのはる}からも見つかりました。完全な形で約5キロの重たいものです。この地域からは東日本の縄文時代晩期の土器も見つかっています。この時期に朝鮮半島から米作りが北部九州に渡来し、停滞・衰退した東日本の縄文時代末期の集団が西日本に移動した様子を物語る感じなのです。

大分県北部にたまたま東日本縄文時代晩期の土器が何点か入っているぐらいでは、交流があったことを示す程度なのです。しかし、この御物石器がそっくり完形品^{かんけいひん}で山の中からぼこっと出てくるということは、それをマツリの道具としていた集団が、ここでマツリを行ったと考えなければいけません。「ある集団が特定の意味をもって形や文様を作り、一致して、大切に守り折り祭った」社会的価値があるものです。つまり「この形は大事だ」と考える集団にしか意味がないのです。

御物石器が運ばれて行く背景には、これに価値があり信仰した人達が集団で移動していったと思います。

縄文時代が終わりかけている動乱期に、集団の意思統一や連帯のために、マツリをしっかりと行う。西から来る新しい文化に対して、自分たちの意思を統一して折る。そういった状況下のシンボルが、この御物石器ではないでしょうか。それが富山や岐阜県にあるのは、当時ここに非常に強い文化領域・地域性があったということだと思います。

私は文化圏を探る上で、土器文様と土偶、それからいわゆるマツリの道具が重要だと思います。津軽海峡縄文のクニには北海道式石冠^{せいのりょうとうがたせきかん}や青龍刀形石器^{せいりゅうとうがたせきかん}があります。そういう実用品ではないと思われる物の分布が、一つの文化圏にピッタリと一致します。共通の言語で、似たような世界観、価値観、宗教観を持っている。そういったまとまりが、こういうマツリの道具で見えるのだと思います。

そうした同じ宗教観、同じ世界観を持ったという集団が力を持つということは、その地域は一致団結しなければいけません。一致団結するためには経済力がなければいけません。そういう意味では文化圏というのは、ある経済に支えられたものだと思います。

北陸は落葉広葉樹林帯にあります。落葉広葉樹の森というのは、実は縄文的生業に適した森なのです。その森は、ちょうど岐阜と富山辺りが西の外れになります。ですから、もし縄文時代の西日本と東日本があれば、東日本の一番端っこを形成する地域性をもつといえます。そういう意味からも関東中部地方、そしてこの北陸・岐阜県の地域は同じエリアになります。その中でも北陸-岐阜のこの地域は時々強い個性を発揮します。その一つが御物石器です。

遺物が語る縄文時代の物流

物流の一つを示す物に下呂石があります。下呂石というのは縄文時代のブランド石材です。当時のブランド石材の一つである北海道の黒曜石は、本州の真ん中まで運ばれて来るぐらい重用されました。一方、下呂石は下呂市の湯ヶ峰が原産地で、岐阜・富山を中心に、富山では神通川を中心に分布しています。下呂石の分布からもこの地域の力と地域のまとまりが分かると思います。岐阜・富山の強い地域性には、物流を促して、ここに集める経済力がありました。それは「美濃・越中」縄文のクニみたいな地域圏を、我々に見せてくれていると思います。

北陸の糸魚川産のヒスイは、山形や秋田にはあまり分布していないのに、同様に強い個性を持った津軽海峡縄文のクニには非常に密度高く分布しています。一方、縄文時代後期後半になると、南九州から沖縄にも分布していきます。西日本が力をつけ始めると、糸魚川のヒスイが、南九州から沖縄まで入っていきます。沖縄では明らかに糸魚川のヒスイという鑑定結果の出たものが、私の知る所では4,5遺跡から出てきています。そのように経済的な自立の中で物流が起ります。

それから、タカラガイやイモガイという南西諸島・伊豆諸島など南方でしか採れない貝が本州の縄文時代の遺跡から出てきます。タカラガイは安産のお守りに関係するのでしょうか。実物が手に入らない北国ではタカラガイの実物に似せた土製品を作ったり、石で作ったりすることもあります。北代遺跡からも粘土で作られた「タカラ貝形土製品」が出土しています。津軽海峡縄文のクニにも、粘土や石で貝に似せた形を作っています。

これらは装飾品として使われていましたが、縄文時代の装飾品は、「私はこれをつけるよ」という個人的なものではなく、価値があるのだという物を共通した装飾品として身につけます。「私はこういうステータスです」とか「出身はここです」ということを外から見て分かる一つのサインでもあります。タカラ貝形土製品は、これまで富山県側でだけ出土していましたが、岐阜にも若干あると聞きます。そういったことも人々のまとまりを示すものですので、私たちはこのような物を見抜いて背後にある集団を浮き彫りにし、それを共有した人々がどのように願い、祈ったのかを考えなくてはと思います。

繰り返しますが、共通してその形やそのもの自体に価値を認める集団の存在を知るには、まつりの道具や文様等に現れる特徴を捉えることです。自分達はこのような文様の土器を作り、このような土偶でマツリを一緒にして、墓はこのように作り吊うのだという共通性をもつのが部族だと思います。部族が集まって強い地域性を持っている、そういった文化圏をもつ部族集団、その地域圏・クニが全国各地にあったのでしょう。

日本列島をどう捉えるか

日本の歴史の中で、「縄文時代」は日本固有の最初の文化段階・時代とされています。その次は「弥生時代」です。しかし、北海道には弥生時代・文化はありません。九州も南九州は米作りも古墳も存在しませんので弥生文化の存在、古墳文化の存在は微妙です。

このような問題をあまり考えずに、初めから日本は一つで縄文時代があって、弥生時代があって、古墳時代があると、教えられてきました。一方中国では一括で「○○時代」というのはありません。中国新石器時代という言い方はありますが、例えば仰韶文化や浙江省の河姆渡文化など、みんな一定範囲に広がる文化圏の集合で捉えています。それに対し日本はなぜか全国を一括しています。これには恐らく無理があるのでしょう。私がこのことに気が付いたのは、中国社会科学院考古研究所の所長王巍さんと飛行機の中で話した時に、「何で日本は一括で○○時代というのですか。中国だったら文化圏で考えます」と言われたからです。要するに文化のまとまりで捉えていて、当時、国境はないというわけです。日本は何か日本国あるいは国境ありきの考え方をしているように思えます。

日本が一つであって、縄文時代から階梯的に進んで来たと考えること自体がおかしいのだと思います。今年の4月、初めて国がアイヌを先住民族として認定しました。何か変な話です。認定するもしないも、アイヌの方々は初めからずっと居たわけです。国会でも時々、「日本国民は」とか「日本民族は」というようなことを取り上げます。そこには地域の視点というものがなく、初めから日本の歴史ありきのようです。

人々は、それぞれの地域に根ざして仲間意識を持ちながら、共通のあるエリアで暮らして来たのです。私はなぜそれを出発点としないのかと強く思います。それぞれの地域にしっかりと歴史があり、その歴史をもっと解明していくためには今後は地域的な視点が必要だと思います。

(平成 21 年 7 月 26 日 記念講演会)

注1 飛鳥・奈良時代の現存する建築物としては法隆寺西院伽藍、法起寺三重塔（ともに奈良県生駒郡斑鳩町）が最古。法隆寺西院伽藍は670年の火災以降の7世紀末～8世紀初めの再建、法起寺三重塔は8世紀初めの建築と考えられている。奈良時代の建物は、唐招提寺、薬師寺などに残っている。

古代社会の中央と地方

重要文化財美濃国刻印須恵器を中心に

Hiroshi Takagi 高木 洋

名古屋大学大学院文学研究科修士課程修了（考古学専攻）。

岐阜市教育委員会社会教育課で文化財保護行政を担当。

老洞古窯跡（岐阜市、現・史跡）発掘調査に参加、保存計画立案。

史跡・加納城跡（岐阜市）第1次発掘調査及び保存整備計画立案、織

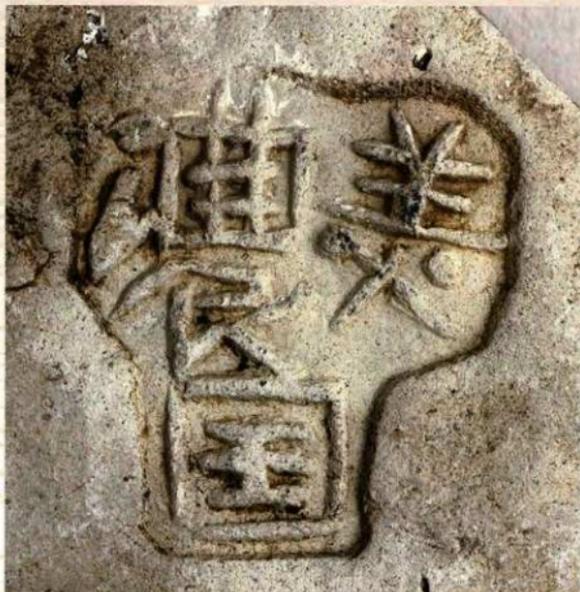
田信長居館跡の第1次発掘調査及び史跡整備事業を担当。

2000年から岐阜市歴史博物館に勤務、2007年から館長を務め、2010年

4月退任。

在任中JICA（国際協力機構）から中東シリアに派遣、アレppo・ナシヨ

ナルミュージアムの展示改善計画を立案・指導（2006年10月まで）。



美濃国刻印須恵器 刻印

はじめに

こんにちは。ただ今ご紹介いただきました岐阜市歴史博物館の高木と申します。富山の印象として、私が第一に思いますのは、駅前から路面電車がでていくということです。実は岐阜も、数年前まで駅前から路面電車が3路線出ておりました。郊外を結ぶ路線なのですが、3本に同時に廃線になりまして、今駅前にはバスのターミナルだけがあるという状況です。私は最近、全国の駅前が同じような顔をしていると感じますが、富山市は路面電車あるからだけではなく、岐阜市とはちょっと違う空気があると思います。全国同じような駅前というのは偏見かもしれないのですが、地方と中央との関係で中央に力がある時代はどうしても全国が均一化してくるというか、多様性が少なくなるというような感じを抱きます。

地方の時代とか、最近では知事の反乱などの言葉がありますが、地方と中央の関係は都市の顔に現れてくる気がします。今日はそういう中央と地方ということ、時代をちょっと遡りまして古代を中心に考えていこうと思っております。と、申しましても私は岐阜市の教育委員会の地方公務員で、ずっと岐阜におりますのでなかなか大きな広い視野で物を見ることができません。ですから岐阜のことを中心にお話をさせていただきます。その中で中央と地方の関係を富山市の皆さまでも考えて頂けるヒントになればと考えております。

越中と美濃の南北交流

この展示会は「岐阜市富山市都市間交流事業」の一環として開催しておりますので、富山と岐阜、南北交流に関わる考古資料が展示されています。その南北交流を示す出土遺物に、縄文時代前期の「玦状耳飾り」という石器があります。玦とは中国の玉器の名前だそうなのですが、輪になった部分の一部が開いたアルファベットのCの字のような形をしています(写真1)。耳たぶに穴を開け、耳飾の開口部を差し込み装着したと考えられています。付ける時はかなり痛かったのではな



写真1. 玦状耳飾り (小竹貝塚)



写真2. 御物石器 (佐野遺跡)

いかと思います。

球状耳飾りは富山から新潟、能登に生産地があります。また、どこが具体的な生産地であるかは分かっていませんが岐阜からも球状耳飾りが出土しております。南北を結ぶ考古資料の一つではないかということですね。

続いて縄文時代の後期・晩期には、奇妙なものですけれども御物石器（写真2）という遺物があります。皇室に献上されたということで「御物石器」という名前が付けられていますが、正確な用途は分かっていません。宗教的なにおいがするものであることは確かです。これも南北、日本海側から太平洋側にかけての縦に長い分布を示しています。交流とはモノをもって人が動いたということですので、間違いなく南北交流があったことは確かであろうと思います。

そして、下呂市の東のほうの湯ヶ峰という山から産出される「下呂石」という石器の材料（写真3）があります。その下呂石は、もちろんその岐阜県内に石器を作った材料として広がりを持っているのですが、富山市を中心として富山県内にも非常に多く運ばれ、利用されていることが分かりました。これは富山市埋蔵文化財センターの古川所長のご調査で最近明らかになったことで、今回の展覧会の最大の成果といっても良いかと思います。図1は下呂石の分布です。こういった縦の広がり、おそらく川によって川沿いに運ばれているのだと思います。真ん中の三角印、ここが湯ヶ峰です。ここを中心として広がりを持っているということなのです。川沿い、富山側では神通川、それから岐阜県内あるいは愛知県には木曾川、あるいは長良川を使って、広がっているというふうに思います。

このように交流の南北軸が認められるわけなのですけれども、南北軸だけではなく、もちろん東西の分布も色々な物で見られる



写真3. 下呂石原石

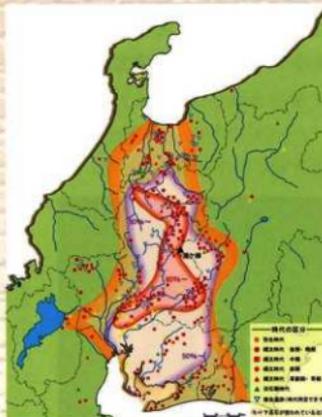


図1. 下呂石の使われている遺跡の分布図

わけです。むしろ、東西の方が歴史的に見ると目立つことが多いと感じられます。例えば日本海側で言いますと、明らかに海上交通を利用した人・物の動きがあります。岐阜県では川が中心ですけれども、それに留まらず山越えて東西方向に物が動いているということなのです。この東西方向に物・人が動くということなのですが、もちろん自然状態の中でもそういうことはあるのですが、弥生時代あるいは古墳時代になりますと、クニの中にかどうか日本列島の中に中心が出来てくる、核のようなものが出来てきて、そこと地方との関係が出来てくる、それが東西の色々な物事の分布、物の流れ、人の流れになってくるということかと思えます。

美濃国刻印須恵器と老洞古窯の発掘調査

前置きがちょっと長くなりましたが本題に入っていきます。縄文時代の話から始めましたが、講演の中心は8世紀の初頭あるいは7世紀末というような時代です。今回の展示の中に、国の重要文化財に指定されている「美濃国刻印須恵器」（写真4）があります。「美濃」あるいは「美濃国」とハンコ＝刻印を押した須恵器で、刻印須恵器と呼ばれています。須恵器というのは5世紀に朝鮮半島から技術が伝わったと云われている焼き物です。6世紀の古墳、6世紀以降の古墳を掘れば、石室から出てくるという一般的な焼き物ですが、今回はそれよりちょっと時代が下がる8世紀の初頭の須恵器です。

須恵器に刻印されている美濃という文字は、ある一定の時期に今の「美濃」になったことが分かっています。美濃だけではなく、例えば「信濃」ですが、信濃の場合はもともと理科の「科」に野原



写真4. 美濃国刻印須恵器

の「野」と書いて「科野」といっていましたが、この「信」じる「濃」という字にある時点で変わりました。一方、美濃の方は、もともとは「三」つの「野」と書いて「三野」と言われていました。それが大宝元年701年に「御野」という表記に改定され、最終的に708年ごろに「美」しい「濃」と言う「美濃」という字になっています。この708年ごろ同時に信濃も表記の改定がされたということですね。この変化というのは一般の人にはあまり縁のないことのように思います。

この「美濃」と国名が入った刻印須恵器は「老洞古窯」という岐阜市の東に所在する窯で焼かれています。この老洞古窯は国の史跡ですが、「官窯、国の直接経

営する工房ではないか」ということが理由になって指定されています。考古学的に老洞古窯が操業開始は美濃の国名改定があった708年ごろと矛盾しない年代観ですが、その時期に一般の人が使わないような国名を入れた須恵器を焼いていた窯であるということで、国の史跡に指定されているわけですね。官窯というのは、例えば中国の景徳鎮のような「国家政府の直営の窯」というイメージです。それで、老洞古窯も官窯であれば国が直接経営するようなものではないかと思われていました。当時の政治体制ですが、教科書的に言いますと律令制ということなのですが、具体的に言いますと中央に権力を集めて支配をしていくという体制です。その一環として地方の窯も官窯として築いて経営をしていたのではないかということなのです。

この老洞古窯は昭和53年に発掘調査を行いました（写真5）。もう30年前のことですので写真も色が変になっていますがご容赦ください。当時の発掘調査は、今はあまりやりませんがグリッド法という格子状に掘っていく方法でした。この時は名古屋大学と岐阜市の教育委員会の共同の調査で、名古屋大学の留学



写真5. 老洞古窯の発掘調査

生も参加していました。イギリスのオックスフォード大学とアメリカのハーバード大学から来た留学生と一緒に参加して非常に国際色豊かな発掘になりました。私たちが若くてあまり外国人と一緒に発掘したことが無く、この時は彼らも日本語があまりうまくなかったのですが、とにかく土日なしで雨以外はやるぞという前近代的な体制で発掘をやりましたので、「日本人クレイジー」だと言っていました。

その際の発掘調査のおかげで色々なことが分かりました。ちょっと分かりにくいのですが、山の斜面の中央上のほうに少しだけ見えているのが3つの窯です。その中に老洞1号窯という窯の本体で、焼き物を実際に焼く所があります。今は天井が落ちていますが、トンネル状の下から火をたいて、火が上がっていく間に焼く穴窯という方法です。それから格子目状に掘ってあるところがありますが、上の方の窯本体の方が茶色っぽく、下の方が黒っぽく見えています。下の方を灰原と言います。須恵器を焼いた後に灰や不良品・失敗作などを掻き出して下に落とします。下の方が斜面になっていますので、手前から後ろの方に下の方に灰を掻き出して落したものが堆積して黒い層となって広がっています。これを灰原と言っているのですが、ここにあるのは不良品だけです。要するに製品としては世に出せなかったものがこ

ここにたくさん詰まっています。しかし、これが考古学的には非常に面白い部分なのです。この1号窯灰原の左の方に、さらに重なるような形で2号窯の灰原というのが乗っています。次に1号窯の本体を掘り終わったところ(写真6)です。これが1号窯窯跡の全体で、中にはいくつか焼き物の破片が見えます。この手前といいますか後ろが灰原です。これを発見したのが地元の中学生で、発掘調査にも一緒に参加しました。



写真6. 1号窯全体

様々な刻印須恵器

刻印須恵器の表面の刻印には色々なパターンがあります。「美濃」(図2-①②)、「美濃国」(図2-④⑤)や、「美濃国」(図2-③)などです。①-③は刻印が陰刻ですが、それに対して④⑤は陽刻で字が浮いています。要するにハンコが陰刻でそれを押した結果、字面が飛び出てくるということです。それからヘラ書き(図2-⑥)もあります。ヘラ先を使って「美濃」と縦に手書きで書かれています。これらの刻印須恵器は発掘調査結果等で8世紀の初頭に焼かれたもので間違いないとされています。

それから、押された方ではなく、押す方のハンコも出土しています(写真7)。当然のようにハンコですから、美・濃は左右逆になっています。「美」は左右対称ですが、「濃」は非対称でさんずいの位置から裏返しになっていることがわかってと思います。

刻印須恵器の拓本を2つ並べてみました。「美濃」の下の「国」の部分があるもの(図2-③)、ないものです(図2-②)。



写真7. 美濃印



図2. 刻印須恵器拓本

実はこの2つは同じハンコを使って押された刻印で、「美濃」の書体が同一なのです。ハンコを良く見るとうすうすと「国」の痕跡が見える部分があります。非常に面白いことなのですが、ハンコの下にももとはあった「国」という字を削り取っているのです。大事な国名を入れたハンコで、現代で言えば公印にあたるものなのに、なぜ再利用が出来るのか疑問に思いますよね。

公印という役所勤めの方はご存知ですが、かなりもったいぶった扱いをするのです。ちゃんと公印使用簿・整理簿を作り、職員が決裁をとって押すもので、勝手には押せません。ハンコにも表彰状用や土木部が使っている土木専用印など色々な印があり、取り扱いは非常に堅苦しいといえますか、間違いがあつてはいけないというような扱いをするわけです。使い方も表彰状の場合は市長の名前の最後の字を字に少しだけかけるように押す。普通の文章の場合は市長の名前の最後の字の半分かけて押すと決まっているのですね。そういうことを非常にきちっと守ってやっている。それだけ公印は大事なものだということなのです。

ところがこのハンコでは「国」を削り落として再利用をしています。大事な公印なのになぜこんなことするの、ということですね。以前は何らかの、国に変動があつて、美濃国の国名の「国」の字をわざと削り落とさせたのだと、というような説も一部にはありました。ところが、現在では「国」の字が欠けて使えなくなったから、削って「美濃」だけで使うようにしたのだらうという考え方が一般的です。

老洞古窯は官窯か？

この「国」を削った印が押された刻印須恵器の存在から、本当に老洞古窯は朝廷が直接管理するような官窯なのだろうかという疑問が出てきました。官窯はその国直営のもので、国名が入った印の使用を、工人など焼き物を焼く側が自由にできたのか、更に、なぜわざわざ新しい国名を入れた須恵器を焼いたのか、というような疑問も出て来て、「一体老洞古窯というのは何なのか」ということが問題になってくるわけです。これは最近いくつかの論文がありまして、問題が広がってきています。

先に私の考えを言ってしまうのですが、老洞古窯には地方豪族、例えば郡司クラスが関与していたのではないかと考えています。つまり国が直接営むのではなく、伝統的な地域の権力者である地方豪族層が関与して老洞古窯を経営したと考えております。

美濃では地方豪族として力を持っていた「村国氏」であるとか、「身毛君氏」という氏がいました。越中の場合は射水臣や利波臣が非常に有力で、しかも伝統的

な地域権力として存在しずっと長い期間力を持ち続けていたという状態だと思えます。中には地方豪族の出身で中央から派遣される国司の地位まで上がった利波臣氏の志留志^{しりし}という人物がいるようですが、基本的には地方にいた地方豪族が、その地方で支配を完徹^{かんてつ}していったというように考えております。

刻印須恵器の分布図(図3)の黒い点は刻印須恵器を出した遺跡の位置です。刻印須恵器が官窯の製品だという理由の一つは、平城官跡^{へいじょうきせき}や伊勢の斎宮^{さいみやう}、美濃国内では国分寺など国の機関、あるいは国の機関に直結するような場所からの出土例があるということです。長野県信州の飯田市にある恒川遺跡^{こうがせき}からも美濃国刻印須恵器が出土しています。恒川遺跡の読みは「ごんが」、つまり「郡衙」と読みが良く似ているのでそこに由来しているのだと思いますが、郡の役所の遺跡と言われているので、東山道^{とうざんどう}を西から東へ行くと、美濃から信濃へ峠を越えて行きます。越えた所にあるのが、この飯田市の恒川遺跡です。位置的に非常に重要な所にあり役所の遺跡だということで、やはり刻印須恵器が出てくる意味があるだろうと言われております。

しかし、このような特殊な数例を見て、それを官窯とするのはちょっと無理じゃないかという疑問が当然出てきます。老洞古窯^{らうどうこやう}の周りに刻印須恵器が濃密に分布していることは明らかで、分布は生産の場所である大元が一番濃く、距離が離れるに従って薄くなっていくということですね。確かに分布図では老洞古窯の周りからは50箇所ほど、最新の出土例を入れると現在では60箇所を超えており、刻印須恵器の多くは美濃の中心部に非常に濃く出てきているのが分かります。

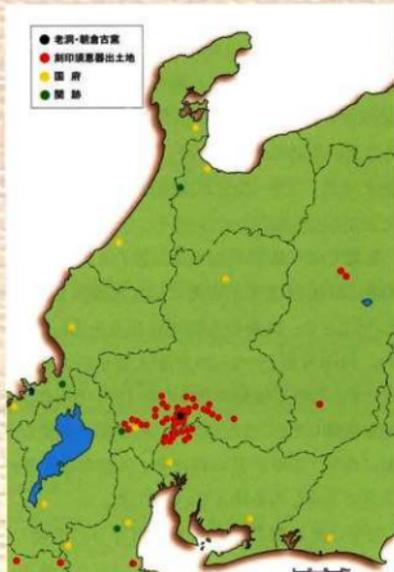


図3. 美濃国刻印須恵器出土分布図

ところがもう一つ疑問に思うのは、刻印須恵器は美濃国内だけではなく、よく見ると尾張^{おわり}の方にも分布しているのです。尾張北部、木曾川のちょっとと南側まで広がっ

ています。この集中している所は村国氏が支配していた領域に重なっているのではないかというふうと考えられております。そういったことから地方豪族村国氏の老洞古窯への関与が考えられます。

古代の関の役割

ここでちょっと話がそれますけれども、古代では3つの関所が非常に重要なものとして、政治的に位置づけられていました。古代三関と言います。三つの関と書いて「さんげん」と呼びますが、伊勢の鈴鹿関、美濃では不破関、それから福井県の愛発関、これは敦賀市と推定されています。この3つの関所が重要路に位置づけられていました。関所は国境にあるというのは当たり前の話ですが、よく見ますと国府も関所の近くにある例が多いのです。分布図(図3)の黄の点は各国の国府、緑の点は関所の位置です。不破関、鈴鹿関ともすぐ近くに国府があります。越前もそれほど離れてはいません。それからもう一つ、国府はその国の中で都に近い位置にあるのですね。要するに東日本は、西よりにある。加賀と越中ともそうです。越中の場合は、三関ではないのですが砺波関というのが加賀との境にあります。射水に越中の国府があるのは、越中の中でも西よりに国の中心がある。美濃もそういうことなのですね。関所というと「東国に対して東国の反乱勢力が中央へ来ないようにそこで食い止めるためのもの」というイメージがありますが、実は逆に「中央の動乱、例えばクーデターなどが東国に波及しないように国境で止めるためのもの」という考え方がかなり強くなっているそうです。

美濃では不破関が出来る以前の672年に、古代の一番大きな争乱である「壬申の乱」が起こります。吉野にいた天智天皇の弟、大海人皇子が「不破道を閉鎖せよ」ということで、美濃の支配地に指令を出します。その時に動いたのが先ほどの村国氏、村国男依という人が大海人皇子の大將軍になって近江の国に進攻したということです。この不破関の近くの野上という所に、大海人皇子は1ヶ月仮の宮にあって軍を指揮したということです。その後、要するに大海人皇子、後の天武天皇が勝ち組になり、壬申の乱の後はそこに連なる美濃の豪族村国氏、あるいは身毛君氏が非常に大きな力を持ってきました。

壬申の乱以来の動きというのは今日の問題ではないのですが、越中においても地方豪族が国との関係を持つことにより力を維持していったと考えられます。中央の側からすると、地方豪族の力を借りて律令制を完徹させていく、というような関係かと思えます。壬申の乱は、律令制という中央集権への道の出発点と言われていますけれども、逆に言えば、中央集権としての律令制は地方権力の前提なしにはできなかつ

たということが言えるかと思えます。

話がまた逸れますが、美濃では白鳳時代、7世紀の第4半期の寺跡が現在30箇所超確認されています。その内の3分の2が飛鳥の川原寺式の形式の瓦が出土しているということで、そういった意味からも中央と地方の関係の上にそういった寺が建てられるようになった、というふうと考えております。

老洞古窯と美濃の窯業

老洞古窯に戻りますが、1号窯の隣にある土層の断面（写真8）です。右上が1号窯の窯跡で、その左の下の所が3号窯の焚口です。その奥は掘れなかったのですが、ここで火を焚いたということです。この3号窯の焚口の上に1号窯の灰原が堆積していますので3号窯は1号窯より古くなります。その1号窯の灰層、灰原の上に2号窯の灰原が堆積していますので、1号窯より2号窯が新



写真8.土層断面

しいことになります。順番で行きますと3・1・2の順番に窯が築かれて操業したということです。発見順に1号・2号と名付けましたが、操業の新古で言いますと、3・1・2の順番ということです。

ここで重要なのは美濃国刻印須恵器が出土しているのは1号窯だけで、3号窯や1号窯より新しい2号窯の灰原からは1点も刻印須恵器が見つかっていないことです。要するに、1号窯だけで刻印須恵器を焼いていたということになるわけです。

美濃の焼き物生産は7世紀に美濃最大の窯業地帯に成長し「美濃須衛古窯跡群」と呼ばれます。老洞古窯も、その美濃須衛古窯跡群の一群で、刻印須恵器を持たない3号窯、それから2号窯、間に入る1号窯、これは全て美濃須衛古窯跡群の一部であるわけです。その美濃須衛古窯跡群の伝統的な焼き物の歴史の中で、たまたまこの老洞古窯1号窯だけで美濃国刻印須恵器が作られていたとなると、「それでは老洞古窯が官窯で、刻印須恵器を国がつくらせたというのは変じゃないか」ということになるわけです。

美濃国刻印須恵器というものは、国が作らせたということではなくて、もともと伝統的な地域の焼き物生産の歴史があり、それに中央政府が便乗する形で「今度、美濃という美しい良い字に国名を変えるので、それを刻印した須恵器を焼成しよう」ということだったのかなと思います。したがって、初めから老洞古窯が官窯や国営工

房として出発したわけではないということが分かるわけです。

中央官僚と地方豪族

美濃には当時、笠朝臣麻呂という人が国司として8世紀の初頭に赴任してきます。この笠朝臣麻呂という男は非常にやり手だったようです。辣腕を揮ったということらしいのです。任期を終えて中央へ戻ると当然位が上がり、最後は出家しました。後の時代の中仙道、木曾路というものがありますが、この木曾路を開通させたのが笠朝臣麻呂です。実は、笠朝臣麻呂の赴任してくる前から木曾路というのは工事が始まっていたのですが、赴任中に木曾路を完成させたので笠朝臣麻呂の業績だとされています。その他、天皇の行幸を果たすなど色々なことをやっています。その派遣されていた国司が村国氏等の地方豪族に働きかけて、全国に例のない刻印須恵器というものを焼かせたのではないかとこのように考えております。

越中の国司では、少し後の時代ですが大伴家持がいます。家持は歌人として有名で、どちらかというと文化人的イメージがあるかと思うのですが立場は笠朝臣麻呂と同じ国司で、国から派遣された中央官僚です。在任は天平18年(746)～天平勝宝3年(751)の5年ぐらいでしたか、通常国司の一国の在任期間は4年～6年なので、大伴家持もそれに準じていると思います。

ところが、笠朝臣麻呂は全国でも異例の14年余りの長期間、美濃国司として辣腕を揮い色々なことをやっています。この時期美濃は全国的に非常に大きな存在になっていきました。のちに按察使という、いくつかの国を統合した管理監察制度ができるのですが、笠朝臣麻呂はこの按察使に就任して、ほかの国の管理も関わっているというような存在になっていきます。そういった中央官僚と地方豪族の関係というのが、美濃でも越中でも重要な古代のあり方であったのではないかと思います。

刻印須恵器が語るもの

最後に昨年、私にとっては非常に重要な発見、再発見がありました。この刻印須恵器(写真9)のは30年間、印の形式が分かりませんでした。刻印須恵器は1250点あるのですが、その中でこれだけは形式が不明でしたが、ある日突然「ちょっと待てよ」と、試しに拓本(図5)をとって裏返しにして写真にあててみたら、ピタリとこれに一致するもの(図4)があったのです。拓本(図5)を良く見ると、これは裏字で「国」、隣は「濃」です。押し直しをしているので、陰影が2重になっています。役所の公印では厳禁ですが、この場合は実にいい加減に押し直しをしています。さらに観察すると、これは元々の印を押して焼かれた須恵器の破片をハンコに加工し、また使っていることが分かってきました。破片の周辺をちょっと綺麗に押しや



写真9. 刻印須恵器

すいように加工してハンコとして使っているのです。だから「美濃国」が表裏逆になっており、更に押し直して陰影が重なっているため30年間何か分からなかったのです。

何でこのことに意味があるかといいますと、官窯で「美濃」という名が大事と言いながら、実

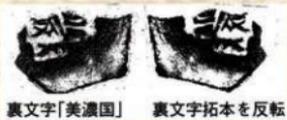
際には「美濃国」と読めないようなものまで押ししていたということなのです。また、この裏字の印だけではなく、ちゃんとしたハンコでも押し直しや重複して2カ所に押されたものがあつたり、押す場所が器の表だったり裏だったり、きちっと公印として統一したルールのもとにハンコを押していたものではなかったということです。ですから国名が大事というのではなく、国名を記号化しているのが大事なのではないか、国名を押すという行為だけに意味があつたのではないかという考えが浮かんできます。

想像をたくましくしますと、刻印須恵器は「美濃国」という字を入れた焼き物を焼くようにという国からの指示に対し、昔の地方官僚で指示は指示として受けながらそれをまともには守らない表面だけ合わせる人間がいた。つまり、中央集権的な体制の中で実は地方独自の動きがあり、伝統的な地域の支配構造から一歩も出ないというような形があつたのではないかと思います。中央集権的な律令制というものも、実際には地方の伝統的な支配環境から出ることは無く、それは形を大きく変えながら今日の中央と地方のあり方に通じているのかも、と地方の役人としては感じます。こういう考古資料からそのような見方ができるのも興味深いと思いますが、ひょっとしてこの場に国家公務員の方がいらっしゃったら、どうか気になさらないようにしていただいで、私のお話はここまでとさせていただきます。どうも、ありがとうございました。

(平成21年8月23日 記念講演会)

裏文字原
体と同形式史料

図4. 刻印須恵器拓本



裏文字「美濃国」 裏文字拓本を反転

図5. 刻印須恵器拓本

富山県における 下呂石の搬入状況

Tomoaki Furukawa 古川知明

新潟大学法文学部卒。日本考古学協会会員。日本旧石器学会会員。

富山考古学会幹事。

1984年富山県教育委員会社会教育課。文化財保護・埋蔵文化財行政を担当。

1985年から史跡北代遺跡の公有化・発掘調査・保存整備工事を担当。

1999年富山県教育委員会埋蔵文化財センター。

2004年から富山城の公園整備に伴う埋蔵文化財調査・石垣修理工事に伴う発掘調査を担当。

2009年から富山県教育委員会埋蔵文化財センター所長。

主な論文に旧石器～縄文時代に関する主な論考に、「ロート状ピットを伴う縄文中期堅穴住居跡について」『考古学と遺跡の保護』、「神通峡の縄文遺跡について」『大境』第24号、「縄文中期タカラ貝形土製品について」『富山市日本海文化研究所報』第35号、「ベンガラ産地推定地における遺物発見について」『大境』第26号などがある。



富山市内から出土した下呂石石核・剝片・石器

1 はじめに

富山平野から約100km離れた飛騨南部、下呂市湯ヶ峰に産出する下呂石は、鋭利な剥片石器の原石として富山平野に持ち込まれていた。旧石器時代から縄文時代における剥片石器には、この下呂石が多く見られることは、富山県内の石器研究者や縄文研究者の中では周知の事実であったが、それらが何時からどれくらいの量持ち込まれていたか、明らかにした研究はこれまでほとんどなかった。それは、下呂石製品の存在が、富山における縄文遺跡では普遍的なことであり、遺跡によってはその数量が莫大である状況から、詳細な集成分析を行うのは困難という意識があったことによる。

本稿は、富山県内の下呂石の搬入状況の概要を明らかにするとともに、下呂石分布圏全体における富山の位置付けについて再考することを目的とする。

2 富山における下呂石研究

富山県内では、これまで下呂石を「ハリ質安山岩」「ガラス質安山岩」あるいは単に「安山岩」等と呼称した。発掘調査報告書には「下呂石」と同定・表記したものは少なく、10例程度にすぎない。

富山県内の下呂石出土状況についての研究は、下呂石研究の母体である岐阜県考古学研究者を主体として始まった。

高山考古学研究会の石原哲彌氏は、湯ヶ峰を中心とした下呂石出土遺跡の分布を50km毎の同心円を引いて図化し、富山市北代遺跡・同古沢遺跡の実地調査を行って富山県2遺跡を報告した(石原1995)。その所見として、北陸では石核がチップとともに出土することから、原石が移動し、各地で石器に加工したことを意味するとした。

2003年から3か年にわたって行われた下呂石シンポジウムでは、飛騨考古学会の岩田修氏が、200km圏内の下呂石の年代別分布状況を集成した。第1回報告では富山県内の9遺跡を掲載(岩田2003)、第3回報告では13遺跡を掲載した(岩田2005)。文献調査を主になされた集成であったが、富山県における研究現状は先述のごとくであったため、富山の分布状況を的確に把握することは不可能であったといえる。

一方富山県内における下呂石の流通に注目した西井龍儀氏は、富山県内の下呂石の搬入状況について、旧石器時代から縄文時代の7遺跡を取り上げ分析した(西井2004)。これによれば、縄文草創期は完成品のみで他の場所で製作され持ち込まれた。草創期以降は剥片や碎片の出土から当地で製作され、剥片石器素材の一定量を占めると分析した。またその搬入ルートは飛騨から神通川水系を下るものであったと推定した。

富山県埋蔵文化財センター平成20年度特別展「飛越交流～飛騨の考古学～」展示図録では、富山県内における旧石器時代から縄文時代の下呂石出土主要遺跡6遺跡を取り上げ、分布図を示した。

近年、下呂石の搬入経路である神通川流域の発掘調査等が進み、下呂石の分布状況が次第に明確になってきた。今回確認した遺跡数は100ヶ所近くになった。遺跡の時空分布と原石・石器器種を中心に、富山における下呂石の搬入状況を概観したい。

3 旧石器時代の状況 (第1図、表1)

富山に下呂石が最初に持ち込まれたのは、後期旧石器時代のナイフ形石器文化期であり、14遺跡が知られる。

遺跡が出現するエリアは4ブロックに分けられ、1. 神通川扇頂部、2. 呉羽射水丘陵地域、3. 小矢部川上流地域、4. 西山丘陵地域である。

1. 神通川扇頂部において右岸高位河岸段丘にある史跡直坂遺跡(直坂Ⅰ遺跡)・直坂Ⅱ遺跡で検出されている。直坂Ⅱ遺跡では検出数量が他遺跡より多い。縦長剥片による小形ナイフ形石器(第2図1)や、縦長剥片を素材とした大型削器等の石器のほか、横長剥片が存在するが、明確な瀬戸内系剥片剥離技術によるものは見当たらない。

2. 呉羽射水丘陵においては、開ヶ丘中山Ⅳ遺跡(富山市教委2001)で茂呂石の切出形ナイフ形石器(第2図2)、射水市小杉丸山遺跡(富山県教委1984)で石刃素材のナイフ形石器(第2図3)があり、石器が単独で出土する例が多い。

3. 小矢部川上流地域においては、立野ヶ原台地における遺跡が主である。西原B遺跡では掻器(第2図4)があり、剥片もわずかに存在する。

4. 西山丘陵では高岡市小野ワラビバタ遺跡の掻器が単独出土している。遺跡は3と同様小矢部川支流の上流部にあたる。

このように、旧石器時代においては、AT直下の台形石器(立野ヶ原型ナイフ形石器群)にはまだ下呂石の使用は認められず、AT以降のナイフ形石器文化の段階から搬入・使用が開始されたとみられる。原石の形状は不明であるが、搬入当初の段階から富山において石器製作を行っていた形跡が認められる。しかし、資料の多くが断片的であり、明確な共伴関係を把握できる資料が少ないことから、今後再考を要する。

下呂石搬入のルートは、飛騨の分布状況からみても、高原川―神通川のルートが最も主流であるが、小矢部川上流のグループについては白川―五箇山経由のルートも想定することが可能である。

4 縄文時代の状況 (第3図、表2)

縄文時代の遺跡数が最も多く78遺跡に及ぶ。年代も草創期から晩期にわたるが、数量のピークは前期、次いで中期から晩期である。下呂石を多出する遺跡は中期を主体とする遺跡が多いが、それらの大半は後期あるいは晩期まで遺跡形成が継続するものが多く、詳細な年代を区分することが困難である。

(1) 各時期の特徴的な状況

縄文草創期には、県内各所で尖頭器・有舌尖頭器の石材に利用される。小矢部市臼谷岡ノ城北遺跡では、一括出土した有舌尖頭器17点中1点(6%)が下呂石である(小矢部市教委1992)。いずれも製品であり、剥片などは識別されない。富山市文殊寺碑田遺跡の有舌尖頭器(大山町1990)は、三角形に尖った舌部の特徴から、岐阜周辺から搬入された可能性がある。

早期には、魚津市桜峠遺跡で局部磨製石鎌が1点ある。トトロ石器と通称される異

形石鏝と同時期で、押型文土器の出現する早期中頃とされる（麻栢 2006）。

前期では、呉羽丘陵北端沖積地の小竹貝塚、射水東部丘陵の平岡遺跡においては、他を圧倒して爆発的に数量が増となるが、資料数のデータはまだとれていない。いずれも前期中葉～末葉の集落で、石鏝・石錐・石匙・削器・ピエス・エスキューなどの石器のほか、剥片類が多数認められ、石器製作を行っていたことを示す。いずれも各種形状の石鏝が他器種を凌駕して多い。石鏝には、側縁を左右対称の鋸歯状に加工するもの、厚さ1mm以下の極薄い仕上げとするものが認められ、一種の芸術品とも言うべき熟練した加工品も散見される。

中期の布尻遺跡では、表面採集（亀田正夫氏による）であるが下呂原石・剥片がまとまって1箇所から出土した。その内容については次項で説明する。

前期～晩期の朝日町柳田遺跡は、複数調査を総合すると、石鏝 78 点中 5 点（6.4%）、石匙 8 点中 3 点（37.5%）が下呂石である（朝日町教委 2003・2005、富山県文化振興財団 2009）。

中期～晩期の朝日町境 A 遺跡は、常願寺川流域以東において、唯一多出する遺跡である。石器における出現率は、石鏝 737 点中 46 点（6.2%）、石錐 114 点中 5 点（4.4%）となり、合計では 6% となる。本遺跡では石匙に下呂石は使われていない（富山県教委 1990）。

(2) 布尻遺跡における下呂石原石の観察

布尻遺跡でまとまって出土した下呂石資料を観察することにより、下呂石がどのような形態で富山まで搬入されていたかを復元する手がかりが得られる。

資料は石核 7 点、剥片 29 点がある。

石核はいずれも礫表皮を残す。大型品 2 点、150～80g の中型品 5 点、35g の小型品 1 点に分かれる。大型品のうち最大のものは、長 18.2cm、幅 16.7cm、厚 9.0cm、重量 2.39kg、次いで長 14.7cm、幅 11.0cm、厚 9.3cm、重量 1.43kg である。いずれも表皮を一部だけ残し、鋭利な剥離面を残す部分が多いことから、搬入後の剥片剥離が行なわれた残核であることがわかる。したがって、搬入時の原石形状は、現状よりさらに大きな、およそ人頭大にもなるかという大きさである。飛騨地域における原石流通は、湯ヶ峰周辺の露頭や周辺河川で採取できる角礫や亜角礫を主体としており、拳大から人頭大であったとしている（長屋 2008）。一方飛騨北部地域においては、神通川流域の飛騨市上上野遺跡で、5.25kg にも及ぶ人頭大以上の大型原石が確認されており（吉朝 2000）、一部大型品での流通も推定されている。布尻遺跡の大型石核は、上上野遺跡の約 2分の1 の大きさで、湯ヶ峰原産地周辺の大平遺跡の石核（沢田 2001）とほぼ同じ大きさである。

また、布尻遺跡の石核の礫表皮は、風化して白色化している。緩やかな凹凸面を残し、凸部はかなり磨耗する。節理面も存在し平滑である。稜角は衝撃痕を著しく残すとともに、頂部は磨耗している。礫表皮には爪状や虫食い状の亀裂はほとんど認められない。

このような表皮状況は、亜核礫の状態を示し、原産地に近接する河川転石を採取したことがわかる。

以上の状況は、飛騨地域への原石搬入状況とほぼ軌を一にしており、飛騨地域の延長としての布尻遺跡への搬入形態として理解される。

しかしながらこのような大型原石は、現在まで布尻遺跡以外では確認されておらず、神通峡以北の消費遺跡において、どのような大きさでの原石供給が行なわれたかは不明である。

(3) 縄文時代における分布と推移

以上のように縄文早期以降中期までは下呂石が多用される。石器は、石鏃・石錐・石匙のほぼ3器種が優勢で、ほかに削器・ピエス・エスキューがあるが少数である。3器種のうち石鏃が最も多く下呂石製石器全体の90%以上を占める。石錐・石匙は少数であるが、両者のうち石匙が多い傾向にある（小竹貝塚・平岡遺跡）。また剥片・石核も増加することから、原石の搬入量が増え、また石器製作量も増加したと評価される。

各遺跡における下呂石数量をみると、神通峡の布尻遺跡、呉羽・射水丘陵の北代遺跡・平岡遺跡・二本榎遺跡で、石鏃を中心に石器量が爆発的に増加する。これらの遺跡は前期後半と中期後半が主体となる遺跡で、この二つの時期が富山県内への下呂石搬入量のピークと考えてよいであろう。地理的にみれば、現在の神通川からやや離れた丘陵部の遺跡に多いことが共通した特徴であるが、縄文時代には神通川流路がより西寄りであった可能性もあり、これらの遺跡群が古神通川に近接した立地であったことは想像に難くない。この意味で、神通川が分布を拡散するルートになったと考えられる。

後期から晩期には、石器数量が激減するとともに、器種がほぼ石鏃に限られるという傾向がみられる。

5 弥生時代の状況（第3図、表3）

県西部における複数の弥生中期集落遺跡出土の石鏃に認められる。数量は少数であるが、高岡市石塚遺跡においては12点中7点（58%）の高率を占める（高岡市教委1988・2001、第4図2）。氷見市鞍川中B遺跡においては12点中3点（25%）を占め、剥片も検出されている（氷見市教委2006、第4図1）ことから、石器製作が行われていたことがわかる。

したがって、富山県において少数であるが確実に弥生中阶段階まで下呂石の使用が継続し、その頃に収束したようである。弥生時代まで継続する複合遺跡は県西部に数遺跡存在するが、その中でも当該期の石鏃が含まれる可能性がある。

6 まとめ

湯ヶ峰から富山までは約100kmも距たるが、飛騨以北、特に神通川流域において、下呂石の搬入は後期旧石器時代後期に始まり、縄文前期・中期に本格的に大量の

下呂石が搬入・消費された。その物量は、同時期の富山に流通した諏訪産黒曜石の量を凌駕する量であったとみられる。また当初から搬入は、原石の搬入・富山での石器製作という消費形態が認められ、また時期・地域によっては、縄文草創期の有舌尖頭器にみるように完成された石器での搬入という形態も存在した。

これまで産地から100km以上距たると搬入量は減っていくといった傾向が示されてきた(岩田1999)。そのデータは今回十分検証できなかったが、原石形態での搬入状況は、特に神通川流域において人頭大あるいはそれ以上の大型品が流通していることを確認した。これは湯ヶ峰から飛騨北部にかけて存在した、拳大から人頭大までの原石流通の形態が、さらに北部の富山平野の手前、神通峡までその流通圏にあったことを意味する。そしてその物量も大きかったといえる。まさに神通川は下呂石搬入の「道」として機能したといえるのである。一方で富山平野に及んでからの原石流通形態は依然不明である。

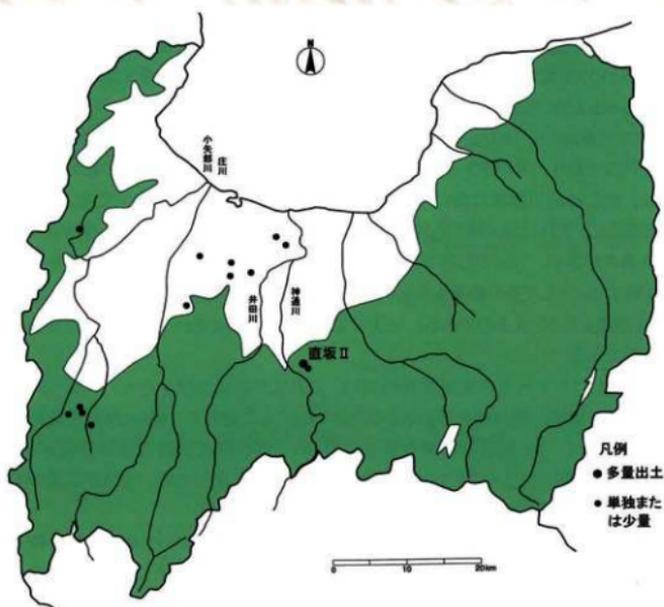
富山における下呂石の使用開始時期は、これまでの出土例からAT以後とみだが、湯ヶ峰から100km圏内にほぼおさまる富山よりもさらに遠方の140km離れた長野県北部においては、AT以前の台形石器に使用される例が野尻湖周辺遺跡で報告されている(中村2007)。このことから地理的にみても、今後富山においてAT以前の石器群に下呂石の使用例が発見される可能性は高いと考えられる。

下呂石流通の終焉は弥生中期頃と推定される。県西部において確認され、神通川以東では現在まで未確認である。弥生期まで下呂石が利用されたことは、神通川上流の飛騨地域においても確認されており(岩田2005ほか)、富山における終焉と類似した状況といえる。下呂石使用の終焉は、武器としての石鏃が鉄鏃へ代替していく過程と軌を一にするものであろう。

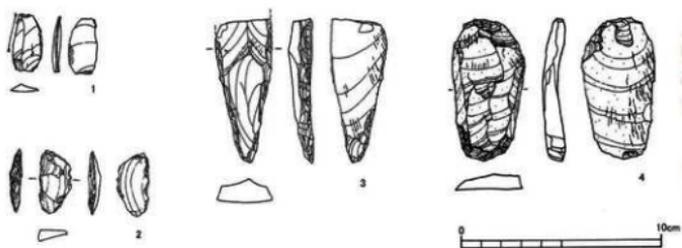
これまで下呂石の富山平野における搬入・利用の状況を概観したが、資料調査は充分とはいえず、とくに岐阜で行なっている下呂石利用率のデータが多利用遺跡で不足している。今後その調査を中心に行っていく必要がある。また富山ではチャート・メノウ・輝石安山岩など在地石材も多様に存在する。その中であって、下呂石の搬入がいつどのような形で始まり、需要の高まりと消長のようすなど、具体的な分析はこれからの課題といえる。

謝辞 本稿作成にあたり、次の方々にご教示を得た。記して感謝申し上げたい。

大野 究、亀田正夫、小島俊彰、久々忠義、久田正弘、佐藤聖子、高木 洋、高梨清志、中村由克、長屋幸二、西井龍儀、藤田富士夫、麻柄一志、三浦知徳、三山らさ、八尾隆夫、山内賢一、富山県埋蔵文化財センター、氷見市立博物館



第1図 旧石器時代の下呂石出土遺跡分布



第2図 下呂石製旧石器 (1～3 ナイフ形石器、4 掻器)

1 直坂Ⅱ遺跡 2 開ヶ丘中山Ⅳ遺跡 3 小杉丸山遺跡 4 西原B遺跡



写真1. 布尻遺跡の下呂石大型石核



写真2. 布尻遺跡の礫表皮を残す拳大の石核



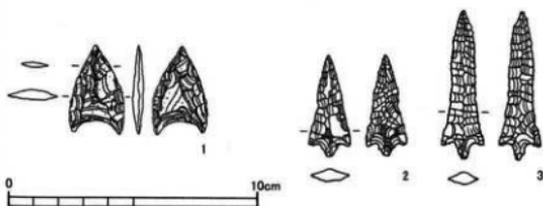
写真3. 石核礫表皮稜部の摩滅状況



写真4. 石核礫表皮稜部の摩滅状況

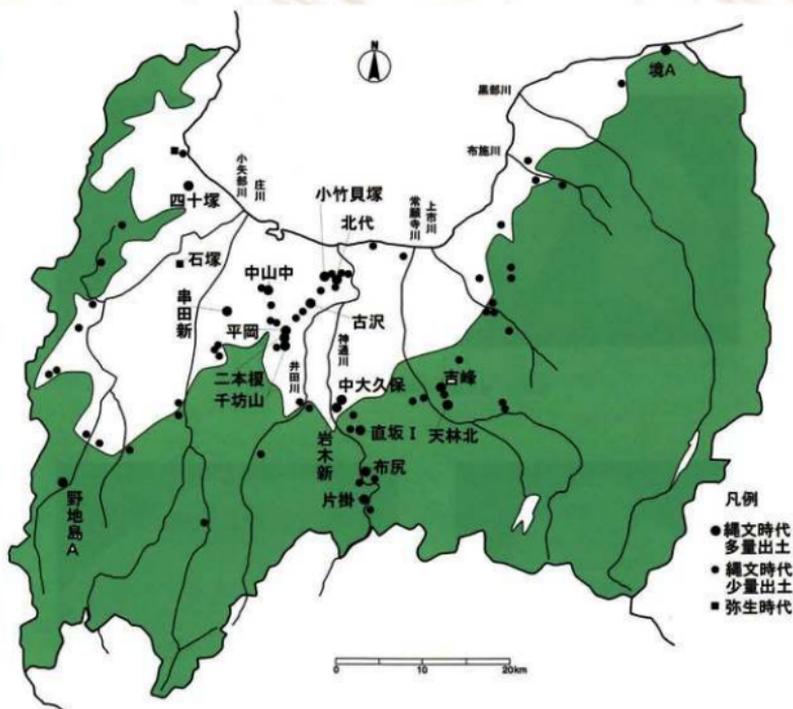


写真 5. 直坂遺跡の横長切片



第4図 下呂石の終焉 弥生時代の下呂石製石鏃

1 鞍川中B遺跡 2 石塚遺跡



第3図 縄文・弥生時代の下呂石出土遺跡分布

木製品から見た

弥生・古墳時代の東海と北陸

Masahisa Yamada 山田昌久

明治大学大学院人文科学研究科博士前期課程修了、明治大学考古学陳列館嘱託職員、筑波大学歴史人類学研究科大学院研究生、筑波大学歴史・人類学技師官、筑波大学歴史・人類学助手、東京都立大学助教授、首都大学東京助教授を経て、07年より首都大学東京都市教養学部歴史学・考古学研究室准教授。

研究テーマは実験考古学、木質・植物質資料を中心とした考古学・生活技術史。

国指定史跡の専門指導や各地にある博物館の展示指導、講演などを行っている。



(岐阜新聞社提供)



史跡北代遺跡の復原竪穴住居

はじめに

こんにちは、山田昌久です。よろしくお願ひします。

我が家は祖父の代に富山県から神奈川県横須賀市に移りました。当時横須賀は海軍の軍港で、私の祖父はその技術職で日本の木造飛行機の開発を担当した特務大尉でした。木で飛行機を造る際、飛行機の荷重に合う木を探して日本中の山を回って、北海道のエゾマツを探し出して、木造飛行機を造りました。そのような祖父がいた結果、家には日本中の山から採集した木の標本がたくさんありました。子供の頃はそれを積み木にして遊んでいましたので、こんな研究を始めるようになってしまったというわけです。

弥生時代の木製品

今日は木製品から「東海と北陸」を比較してみたいと思っています。これは鳥取県の青谷上寺地遺跡から出てきた弥生時代の木製品です(写真1)。木で作られた高坏や壺、スプーンですが、今でも通じ



写真1 青谷上寺地遺跡出土木製品
(鳥取県埋蔵文化財センター提供)

るデザインですね。弥生時代はスプーンとフォークを使っています。日本は箸の国と言っているのですが、弥生時代の遺跡では箸と確認出来るものは見つかっておらず、このようなスプーンが出土しています。岡山県の南方遺跡ではフォークも出土しています。箸というものが日本で使われるのはだいたい5～6世紀ぐらいです。今から2000年ぐらい前に、日本に住んでいた人は、スプーンとフォークを使って食事をしていた人のようです。でも、ほとんどの人は手づかみで食べていたという記録もあり、こういう物を使っていたのはよほど特別な人なのでしょう。

考古学という学問では色々な素材の遺物を研究しています。土器や鉄製品、ガラスや石や色々なものがあります。私の研究対象は木で、木というのは人間にとって様々な分野で使った資源です。木材としての利用はもちろん、道具を作るのにも使いますし、燃料としても利用します。私たちは化石燃料、石油を主に使っていますが、つい5～60年前の暮らしては、薪や炭を燃料にしていました。富山と岐阜の中間の飛騨地域には3月の残雪時に山で木を切って、ソリで引っ張って来て家の燃料にするという「春木山」という風習がありました。木の利用を調査することは、道具や建物の他にエネルギーの研究にもなるわけです。

そのほか木には樹皮・葉・花の部分もあり、それぞれ研究対象になっていますが、考古学では食料としてクリやドングリが研究されていますね。それから樹液。これは漆や松脂です。漆は、9000年前に北海道で使われていた事例があります。縄文時代から樹液を利用していたということですね。縄文や古代の遺跡からは漆の液を採る時に引っ掻い

た傷のある木が出土しています。今は異なる樹液採取法が考えられます。

私たちは現在ほとんど化石資源を利用して生活しています。日用品はほとんどがプラスチック製で、それを道具として使っています。でも、近代から昭和前半以前の日本の社会では、ほとんどが木に由来したものを使っていました。エネルギーとして薪や炭、灯りはロウソクですが、これは植物の油から出来たものです。それから繊維、絹糸は蚕かいこが出すものですが、蚕は桑の葉を食べているので養蚕ようさんには木が必要です。木綿や麻も植物です。そのような木の繊維を使った衣服でした。日用品の桶おけや爪づめなど様々な物もほとんどが木製です。お風呂も以前はヒバの風呂桶で、このように家も材料も含めて、植物由来のものを使って私たちの生活は成り立っていたということになります。

遺跡からの出土品で植物製品の調査をすると、過去の生活の多くの部分が議論出来るのですが、残念なことに植物で作られたものは腐ってしまい遺物として残りにくいのです。一番多く残るのが土器です。だから土器の研究は盛んですね。石器や鉄器の研究も盛んですが、このように考えると植物由来の道具を研究しないと、昔の生活の具体的な姿が見えないのだから考えています。

実験から分かる弥生～古墳時代の道具

私は、大学で学生たちと縄文・弥生・古墳時代の石や鉄の大工道具を復元し、それを使って道具を作ったり家を作ったりする実験をしています。発掘だけではなく、実際に実験をして昔の生活を考えるということです。実験に使う鉄斧などの道具は今の鍛冶屋かじさんに作ってもらいます。しかし、弥生～古墳時代の道具は鉄の刃先に鋼はがねが入っていないため、鍛冶屋さんに無理を言って鋼を入れずに敲たたいて堅くする形で、昔の道具を復元しています。それに柄を付けて実際に作業をしてみました。斧にも色々な種類があります。鑿のみもあるし、ナイフもあるし、今の鉋かんなとは少し違うのですが、槍鉋ややがんなという木の表面を削る道具や鎌かまも製作してみて、実際に昔の仕事をやっています。今日は、そういった結果も含めてお話したいと思っています。

まず鉄斧と石斧で同じ作業をしてみて、どう違うか実験してみました。各々 50 回ずつ木を敲いた所で写真を撮り、その都度作業の進み具合と出来る形を調べてみました（写真2）。直径 20 cm ぐらいのマツの木を鉄斧で敲くと 190 回～200 回ぐらいで切断出来る



写真2 鉄斧と石斧での木材切断実験
(右：鉄斧、左：石斧)

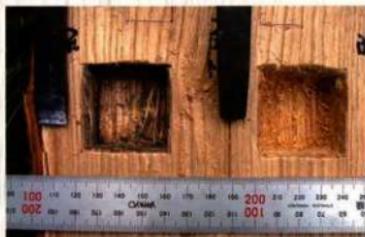


写真3 鉄鑿と石鑿での細工実験
(右：石鑿、左：鉄鑿)

しまいます。石斧に比べるとかなり効率が良いです。そして、マツの木は柔らかいので、石斧だと刃があまり鋭くないので切断面がボロボロになることがあります。でも、鉄斧だとスバッと切れるので、切断面が平らになるという違いがあるのです。

つぎに、鉄と石の鑿で穴を開け比べてみました(写真3)。木を組み合わせる時に^{ほぞ}跡を使ったり溝を切ったりする「仕口接手」という細工ですね。石鑿が右側ですが、石でもかなり細工出来ます。左は鉄鑿です。この実験は色々な木で行い、写真はクリです。クリの木は、伐採したばかりの木材の水分量40%位ある生の木でも、2年ぐらい乾燥させて水分量10%台になった木でも同様に形の加工が出来ます。

以前は弥生時代に入って鉄製の道具が普及しないと、木に穴を開ける細工や製材が出来ないのではないかと考えられていました。ところが、富山県小矢部市にある縄文時代中期の桜町遺跡からこのように穴を開けて細工したクリ材が見つかりました。建築材として木同士を組み合わせるものですが、石の道具の時代ではクリの木だから出来ることなのです。

弥生～古墳時代の遺跡で主に建築材として使われているのはスギです。針葉樹はこのように穴を開けようとすると、生木の時は綺麗に切れますが、乾いた木では柔らかすぎず綺麗に出来ないことが分かってきました。しかし、木と木を組み合わせるのは、生木だと乾燥してから振れるのでうまくいきません。乾燥させてから細工し、組み合わせます。そのため、スギやヒノキの針葉樹の細工は石斧ではうまく出来ないのです。

今日、私たちは木をノコギリで自由自在に挽き切って加工します。木のポリウレームのほとんどを利用して板を作るのですが、鎌倉時代ぐらいまで日本で木を製材する時は、丸木を割っていたのです。楔を使って丸木を縦に割り、それから柱や角材を作っていたということです。

木を割って板にすること、実はとても大変です。木材を割ると無駄になる所がたくさん出てしまいます。木が振れて育っていると、振れの部分で斜めに割れたり途中で折れてしまったりします。真っ直ぐな柱や板にするのは大変な作業なのです。弥生～古墳時代の人々は、今私たちが考えるように自由に1cmの幅の板を作ることは難しかったということが分かります。

これはスギの木を楔で半分に割っているところ(写真4)。ところが、振れて成長した木を割る時は簡単にはいきません。樹皮の振れと中の組織の振れは同じなので、割ろうとすると、時には振れに沿って裂けて曲がってしまうものもあります。振れの強い材は製材しにくいという特徴があります。また、それを割っても鉋がかけにくいから手斧や槍鉋で削り、平らの面を作るという



写真4. スギ材の半割実験

作業が必要になります。これが、弥生時代や古墳時代の木材を加工するということの姿

なのなどということです。

道具から見える時代の動き

弥生～古墳時代の遺跡からは、割った板を使って作られた木製品がたくさん出土しています。木材を組み合わせて作られた箱や机、建築材など、角材や板を自由に組み合わせて、さまざまな物を作っていたことが分かります。また、柄杓や蓋付き桶など、木材を削り出して作る形の製品もあります。弥生時代の遺跡から出土した木製容器を見ると、木を剥り貫いたもの、ロクロで挽いた可能性のあるものや、木を薄く割り裂いて曲物にしたり、板にしたりして指物として使うなど、様々な製法があります。容器により素材を使い分けるとはいえ、岐阜地域周辺と富山県周辺では、生えている木が違います。そうすると、ある目的の容器を作ろうとした時に使う木が異なるため、作り方も異なってくることになります。これから実例をあげて説明しながら、比較していきたいと思います。

これは日本の弥生時代～古墳時代の遺跡から出土した鉄（写真5）です。①は一般的に九州で多く出土する鉄で、真っ直ぐな柄を差し込む四角い穴が開いています。



写真5. いろいろな出土鉄
 (山田昌久編『考古資料大観8』小学館2003より転載)

②は富山県の資料で、近畿、東海、北陸、関東、東北まで分布するタイプです。丸い穴が開いています。③・④は、上に出張った部分が作られており、そこに曲がった柄や反り返った柄を縛って固定する鉄です。だいたい①は九州、②・③は近畿以東に分布しています。

岐阜県大垣市にある荒尾南遺跡は①の鉄が多数出土しています。九州に多いこの形のもの、美濃西部と滋賀県にもあるのです。富山県にも若干入っていますが、②が多数です。

①のタイプの鉄が出土した地域の背景として、弥生時代に九州から一部のグループが近畿地方に入り、近畿地方の当時の中心部ではない地域に移り住んだということが考えられています。そのグループは弥生時代の終わり頃に、この岐阜にも入ってきた可能性があります。実は農具の系統というのは単純ではなく、同じ弥生時代でも岐阜の地には、九州の勢力との関係がある人が入っている可能性が高いと考えられます。どちらかと言うと北陸は、②・③が中心で、弥生～古墳時代の農具の系統は美濃と北陸越中の地域では違うようです。ただ、この岐阜でも古墳時代以降になると、①が少なくなり②・③の鉄に変わっていきますから、九州から来た人々が入って九州の道具で農作業や土木作業をした時期というのは、そんなに長くないのかも知れません。

この④・⑤の鍬の柄（写真6）は、それぞれ幹から枝が伸びた部分を使ったものです。現代の鍬はまっすぐな柄ですよ。なぜこのような曲がった柄を付けたのでしょうか。

日本に入ってきた中国や朝鮮半島の農具のうち、鍬は中国の春秋戦国時代～漢の時代に入ってきました。それは鍬先の穴に柄として真っ直ぐな棒を差し込んだタイプで、本体は①・②に近いものです。その後日本で普及した鍬は③に④の柄を組み合わせるもので、鍬先の上に出っ張りを作り、曲がった柄あるいは幹と枝の屈曲した柄を付けて縄で縛って固定するタイプでした。

それで実際に④の柄を作ろうと、木を一本切って、その幹と枝の部分で使えそうなものを切り出してみました。④の柄は、木の幹からどう枝が出ているかで使えるか使えないかが決まります。幹から枝が曲がり振れて出ていたら柄としては使えません。角度が急でも使えないし、広すぎても難しいですね。だから、自然の状態で柄として適した良い角度のものを探すというのは大変です。

私たちが実際に1本の木から切りだした幹と枝の部分で、これは使えるなということで道具になったのは3つだけでした。あとは、角度が合わなかったり、枝が振れて出ていたりして使えませんでした。

この④の柄を付けたのが、弥生～古墳時代の東海や北陸の鍬の柄です。自然の木と幹と枝を上手く使わなくてはならないので、屈曲した柄というのはとても大変です。

ところが、弥生時代の終わりの頃から、鍬の柄は⑤のタイプ（写真6左）に変わっていきます。この柄も幹から枝が生えた部分を利用していることが多いのですが、幹を太く削った所を斜めに切って角度調整が出来るのです。鍬が大量に欲しい時に一本の木からたくさんの柄が作れます。④の柄だと一本の木から1～2つぐらいしか作れなかったし、柄に使えない木もあります。縛って固定する面倒な鍬ですが、弥生時代終わり頃の人々は、柄を工夫して一本から大量の柄を作るようになりました。これが「反柄」というものです。

九州地域の四角い穴に柄を差し込むタイプは「挿入固定鍬」、一方、鍬先を反柄や曲柄に縛って固定するタイプは「緊縛固定鍬」といいます。挿入固定鍬は農具本体の穴にずっと差して楔を入れて固定するとすぐに使えますが、緊縛固定鍬はとても大変で、鍬先を固定するのに時間がかかります。ところが、わざわざ弥生～古墳時代の人はこの方法を使っています。

緊縛固定鍬にはメリットは他にもあります。挿入固定鍬はしっかりと穴を開けて柄が穴に収まるように角度を非常に正確に細工しないとイケないのですが、緊縛固定鍬は柄と鍬先を縄で調節できるので細工は正確さを要求されません。柄を作る時点で手間をかけるか、それを省略して縛る時に手間をかけるか、多くの弥生時代人、古墳時代人は縛る手間が分かっても、緊縛固定鍬を選んだようですね。



写真6. 鍬の柄
（山田昌久編『考古資料大観』小学館2003より転載）

弥生時代から古墳時代に移行する頃の社会で、鍬や鋤を大量に必要とした時、幹と枝の角度を利用して作った右の柄から、大量に道具を作れるように工夫して反り返った左の柄を作り出したのでしょう。左の柄は、柄の固定部分が細くなるので鍬本体の部分も細くなります。鍬の形も柄のつけ方と対応するように変わっているのです。

また、緊縛固定鍬は棒柄を固定する際の厚く作った部分がいらないので、木を薄く分割することができます。つまり細い木を薄く割って鍬にできるのです。カシの太い木を若干細いものでもいっしょにした工夫なのでしょう。

機能によって変わる道具の形

この鍬（写真7）のことを「茄子形^{なすびがた}」と言います。茄子のへたのように、上が尖がっている。反り返った柄の細い尖がった固定部分に対応するために、細くなっているので固定法で部分の形が決まるということです。美術品の形とは違い道具の形には機能的な意味があり、使い方作り方で形が変化しているのです。

弥生時代の鍬を見ると、鍬の裏方に変なものが付いています。これは泥除け^{どろよけ}だと言われていますが、私は違うと思います。掘った土を中に入れて移し変える時に使うものだと考えています。近畿地方の弥生時代の一番古い時期のものはケヤキを使っているのですが、それ以降は他の農具と同様に硬いカシの木を使っています。泥を除けるのであればもっと軽い木でよいのですが、しっかりとした固い木を使っています。それはあの木の裏側の部分が単に跳ねた土を受け止めるだけではなく、ある程度荷重^{かじゅう}に対して対応力が確保されているからです。

畑等^{うね}で畝を立てる作業時には、土を動かすことが必要になってきます。その時に泥除けとされている部分が意味を持つてくると考えています。真っ平らな泥除けもありますが、だいたい丸みを持っていて、受け止めるような感じになっています。そうして考えると、弥生時代や古墳時代の鍬は土を動かす作業にも関連している可能性があります。泥除けが付く鍬は急角度のものもあります。内鍬ではない物にも付いていますから、耕起時に土や水が撥ね^{はね}るのを防ぐためのものというだけでは考えにくいのです。

地域による木材利用の違い

さて、富山県と岐阜県は当時の文化系統のほか、植生や土壌も違っています。岐阜の辺りまでを植物学では「ソハヤキ地区」（注1）と言います。漢字で「襲速紀地区」と書き、照葉樹林帯です。日本海地区は海岸沿いに照葉樹林もありますが、弥生時代から古代までは、富山県・石川県、鳥取県の平野にはスギが生えていました。今、スギという山に生えている木と思うのですが、日本の古代の本来の森では、平野に2mもあるようなスギの大木がたくさん生えていました。実際に遺跡を発掘しますと、スギの株が大量に出ています。ただ日本海側も、海岸平野部はスギが多いのですが、山の方に入ると、落葉広葉樹がたくさん生えています。岐阜と富山では人が使うことが出来る木が違うことが分かります。



写真7. 茄子型鍬
(山田昌久編『考古資料大観8』小学館2003より転載)

地域によって土も違います。関東地方は褐色森林土壌で、黒い土の下に火山が爆発した時のローム層の赤土が大量に堆積しています。ところが、西の方に行くと土の色が変わって赤い色になってきます。つまり、日本列島には色々な起源の土壌があり、その土地ごとに土質も違うということなのです。縄文時代以降、さまざまな人々の生活の舞台となった土地の条件も地域でずいぶん違うのです。

最近、考古学でこういう土地のことをきちんと議論して考えましょうと「ジオアーケオロジー」という言葉を使っています。ジオアーケオロジーを直訳すると「土地の考古学」で、地面の「地」の考古学なんて呼び方をしています。また、植物や動物の観点から見た生物考古学もあり、様々な人間の舞台の環境の差が、素材の利用の仕方に現れ、生活が変わってくるのだと考えられます。

今回は東海と北陸ということで、太平洋側の静岡と日本海側の金沢の気象データを比較してみました。何が違うかという降水量です。静岡は夏に雨が多く、一方金沢は夏に雨が少ないですね。最近温暖化と言われていますが、北陸は冬場に雪が積ります。石川県や富山県では1～2月辺りに、氷点下になることもあります。これは当然、植物にも影響を及ぼします。次に静岡と岐阜を比べると静岡は雨が非常に多いですが、岐阜はこれ程多くはありません。遺跡から出土した木材を見ると、静岡ではスギが圧倒的に多いのです。ところが、名古屋から岐阜辺りで弥生～古墳時代の遺跡の出土木材を見ますと、美濃の西部の所にはスギがありますが、その他の地域では広葉樹を使うことが多いのです。こんなふうに、気候風土の違いが木材の選択に反映しています。

近年、屋根を土で葺いた復元竪穴住居が作られています。富山市の縄文時代の北代遺跡では、土屋根の竪穴住居を復元しています。弥生時代の鳥取県^{むきぼん}麦木晩田遺跡でも、土屋根の住居を復元しています。これらの住居は荷重に対する対応力が必要なので、木材をたくさん使います。

こちらは家を建てる時に、どのくらいの木を切ってどのくらい木材を使うのかということ进行调查したデータ(図1)です。大学のプロジェクト報告書からの引用で、チームを組んだ建築学の藤田香織先生の研究室で作成していただいた図に、縄文・弥生時代のデータを足したものです。時代ごと地域ごとに1件に必要な量を調べました。現在の岐阜市内にある木造一戸建ての住宅は、1㎡あたり約0.1㎡の木材を使って建てられています。江戸時代ですと0.2～

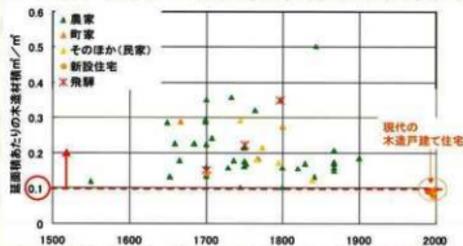


図1. 延床面積あたり使用木材積と建設年代
(木造戸建て住宅の使用木材材積量は年代によらず、0.1㎡/㎡以上)

0.3 m²と、今の倍ぐらいの木材を使って家を造っています。飛騨の山間部の合掌造りの住居では1 m²あたり0.35 m²の木材を使っています。木の利用の中では、家を建てるのが1番ボリュームとして大きく、多量の木材を使います。平均してみると、弥生時代の住居が0.18 m²。縄文時代の住居も同じくらいです。1 m²あたりの使用量が今の住宅の倍近い木材を使って家を造っているのですね。このように考えると、弥生時代～古墳時代の遺跡で100件の家が建て替えられ続けた遺跡がありますが、一体どのくらいの森を壊して家を造っていたのかということが気になってきますね。

富山県平野部では、スギを利用して家を建てています。岐阜市内や濃尾平野全体の弥生の遺跡では、スギをあまり使わずに広葉樹や一部針葉樹の比較的細い木を使い、家を建てているという特徴があります。これは実は大変な違いなのです。先ほど木を割って製材するとお話しましたが、富山・石川、鳥取や大阪ではかなり太い木を使って家を建てています。静岡県とよの登呂遺跡の建築材は直径が2.4mもあります。それを鉄の斧で切って、楔で割って、角材や板材にして家を建てているのです。一方、美濃や名古屋の辺りの人々は、細い木を何本も使って家を建てています。じつは、何本切るとしても、細い木ならば樹齢20年くらいでしょうか。子供の時に芽吹いた木が大人になった頃にちょうど20cmぐらいの太さに成長していて、同じ場所に生えている木から柱材が調達できるのです。

ところが、登呂遺跡で出土しているような大きな木を切ってしまうと、それまで何世代も時間をかけて出来た資源を一度で使ってしまうことになります。現代の私たちはもつとごいんですよね。人が生まれるはるか以前に出来た石油を、この100年で全部使ってしまうように使っています。つまり、資源を生成時間せいせいじかんで考えると、太い木を切ることは、自分の時間で責任が持てない資源を使うということになります。細い木を使う暮らしは、自分の消費分を自分の時間で育て、次世代で使う大きさに成長させることが出来ます。

地域による森林資源の利用

縄文時代のムラの用材径を比較すると、一番古い頃の7000年前の遺跡から出土した木材は、すべて直径10cm位です。縄文時代中期4200年前になると、直径20cm位です。縄文時代晩期になり木を割る技術を覚えた頃は、富山県や石川県では直径60～70cmの巨木を半分に割り、柱に使った建物を建てています。弥生時代になると木を鉄斧で自由自在に割れるようになります。江戸時代以降は植林をして直径50～60cmまで木を育て、ノコギリで挽き切って製材しています。こうすると節があってもきれいな板ができます。一方、弥生時代の人々は木を割って製材しますので、節がある細い木だと変に割れてしまします。直径が太い木じゃないと綺麗に製材できないのです。

大きな木を利用するにはこのような製材技術と、運ぶ力も必要です。現代ならトラックや鉄道輸送、船舶輸送で外国からも運べます。しかし、当時はトラックも高速道路も無いわけですから、切った木を川の水を利用利用して運んでいました。弥生～古墳時代や古代では、おそらく水系を利用した限られた地域間での流通しか出来なかったもので、集落周辺でどんどん太い木を切ってしまうと、森林資源が枯渇こわつしてしまします。逆に言うと、太い木

をたくさん切って使うためには、大きな川の流域と広い平野がないと長続きしないのです。

弥生時代以降、規模の大きな町や建物を太い木から製材した木材で作るとなると、大きな河川の下流域が有利な場所になります。小河川の小さな平野では、大きな構造物を作っても維持継続させられません。だから、岐阜から愛知にかけての大河川が河本もあるエリアというのは、その上流の山も含めて建設資源が見込めるという点で意味があるのです。

しかし、弥生～古墳時代の美濃では、まだそのような利用をしていません。利用が始まるのは、中世以降、江戸時代です。白鳥奉行所が伊勢湾の所にでき、そこから江戸に木材を回送しています。川の流域を利用した木材調達です。

細い木を芯持材しんもちざいで使う方法と、太い木を製材して使う方法の違いが何をもちらすかと言いますと、村を造る時の考え方が変わってきます。用材調達方法が全く違うからです。太い木、例えば直径2mの巨木で高さが30～40mあるものだと、一度に大量の用材を得ることが出来ます。計算上では10棟分の建物が一度に建てられる用材です。

堅穴住居が100棟ある集落跡でも、1棟ずつ細い木を使って家を建てているのと、太い木を使って一度に家を建てているのでは、村の中の建物をどのように更新しているかという原理が違ってしまいます。

古代では天皇が即位するごとに都を変えていました。都を一つ造る時に、その周辺の木を全て使ってしまうため、次の天皇はちよつと違う所に造ります。それをずっと繰り返していましたが、藤原京以降は大規模な都を造営し、何代か補修しながら維持して行く制度に変わっていきます。藤原京造営の木材をどこから調達したかという、はるばる滋賀県の琵琶湖周辺から木材を持って来ています。つまり、大量の木材で都を造り長続きさせようとしたら、遠方から材を持ってこることが必要なのです。このようなことが古代の都城とくじょうの切り替えの時に起こってきているのです。弥生～古墳時代の美濃の集落について、どのくらいの間集落が継続しているかを考えると、集落の造り替え時の用材調達方法が重要なポイントになります。

長尺材運作ちやうじくざいは集中生産の証拠ではない

もう一つ、弥生時代になると岐阜では、鍛すなや鋸のこぎりを作る時に「長尺作」と言い、一本の木から長い板を割って3つ4つの鍛を一度に作っています。ところが、富山はあまり無いのです。九州もありません。

これまで、考古学者は長尺作とは大量生産する仕組みなのだと言っていましたが、大量生産するのであればたくさんの板を集めて一度に作ればいいですから、たぶんそうではないだろうと私は考えています。

大阪平野には長尺作の出土例がかなりあります。ここは人口が集中している都市だと、神殿があると言われていました。そうだと決め付けるのはまだ早いでしょう。大阪の平野部は新しい土地で、そこに入植した各村には、周囲に大径木たいけいぎがありません。生駒山地いこまの古い土地の大径木に頼るしか、鍛を作る方法は無かったのです。建築材は近隣の多数の小径木せうけいぎを利用しているのと好対照です。硬い特殊な用途の木は遠隔地から大量に運ぶ仕組みが選択されたといえます。ところが、そうではない千葉県や神奈川県、

すし
 逗子の小さな平野からも出土例があり、私はこの長尺作^{たんじやく}と短尺作の使い分けが集落規模と運動していないように思えるのです。富山県は岐阜県より長尺作の出土例が少ないです。これは生えている木や森の姿が違うということになります。

樹形を比較してみると、シラカシは幹が真っ直ぐ伸びて長い板が取れます。アラカシは途中で枝があちこちから出ています。カシの木の仲間は硬い木なので、農具を作る時にはだいたいカシが使われます。この長尺作と短尺作という木材利用方法の選択は、たぶん生えている木の形と関係しているのだらうと私は考えています。

弥生～古墳時代の運搬具

弥生～古墳時代の遺跡からは、木を運ぶ道具が見つかります。直径2.4mもの大きな木を切り倒すと、人力では運べませんから、それを運ぶ道具が必要になってきます。「修羅」と呼ばれる古墳の石を運ぶのに使うと考えられている轆^{ろく}もあります。古墳時代には長さが7mぐらいもある大きな轆が活躍して、太くて重い木を動かすことが出来たのです。もちろん、木の一本一本に穴を開け、縄をかけて運ぶということも出来ますが、この轆があれば、木を割った物もまとめて束ねて運ぶということが出来ます。

運搬具は木の製材にも運動していると考えられます。運搬時に、ぐにやぐにや曲がっている形の木を乗せると、真っ直ぐな木を割って乗せるのを考えたら、曲がった木は効率が悪いのです。2m近い板を基に長尺作でたくさんの農具を作る作業の時には、2m幅の板を運ぶ必要があり、こういった轆など大量な数十枚の板を積んで運ぶ手段が必要です。長尺作の長尺板をどのように割り、どのように運ぶかが課題になってくるのです。

これは学生達が木を運んでいるところです（写真8）。直径20cmぐらいの木であれば、このように運べますが、もっと大きな木を割って製材して大量に揃えて積むとかいう時には、轆などが意味を持つてくるのです。そうして考えると、運搬具が有効に機能しない地域では、細い木や曲がった木を使って道具や施設を作るしかなかったのかも知れません。日本海側の地域でも、少し山に入った場所の住居内炭化材は広葉樹が多いので、広葉樹建築だったと考えられます。



写真8. 人力での木材運搬

このように弥生時代の遺跡で木材の利用法を考えると、運ぶ道具がどこにどのようなものか面白いです。スギが大量に出土したり、ヒノキなどの針葉樹を材材として使っていたりする場所には、運搬具がみられます。

地域による木製品の違い

ここで気候と木製品の話に戻ります。私たちがイメージする桶^{ぶく}とは、木の板を丸く並べて箍^{かぎ}で縛ったものですが、石川県や富山県、鳥取県などの日本海側で、弥生時代から古墳

時代の初めの時期によく見つかる桶で、刳り貫いた所に、底板を入れて留めるものがあります。

この桶は東海地方にはあまりありません。同じスギが生えている所なのに静岡県にはなく、日本海側にあります。この桶の分布はスギと相関しますが、日本海側と太平洋側では日本海側と相関します。だから、スギの生育地の中でも積雪地帯特有のものと考えられます。

木材には断熱性と吸放湿性があり、あまり熱を伝えず、水分を出したり吸ったりします。弥生時代の木製容器には桶など様々な器種があり、作り方も色々です。例えば種籾や粉製品や繊維製品を保管する時に、土器の中に入れて置いたらどんなことが起こるのでしょうか。寒い時期だと土器は外温をそのまま伝えてしまい、氷点下では中のものも凍ってしまいます。木で密封した容器に入れておけば、断熱性があるので急速な温度変化に対応出来ます。また、梅雨時などじめじめと湿度が高い時、土器だと結露して中のものが湿気ってしまいます。木製容器は吸放湿性があるので、中のものが外の湿度の影響を受けにくいのです。遺物の桶の中に炭化したイネ科の種実が残っていた例があり、この発想を補強してくれる証拠になります。

一方、東海地方からは土器に籠目の跡が付いたものがよく出土します。地面からの湿気を避けるため、土器に籠をかけて高い所に吊るしていたのでしょう。一方、北陸ではそれでは間に合わず、木の容器に入れて蓋をピッタリ閉めて保管していたと考えられます。

正倉院にはヒノキ製の「櫃」という木箱がありますが、成瀬正和先生の研究で、この中の温度や湿度の年変化を調べたものがあります。そうするとその箱の中の湿度は、1年間全く変わらないことが分かりました。おそらく弥生～古墳時代の北陸や東海に住んでいた人々は、温度や湿度の問題をきちんと考えていたのです。北陸の人は木の密閉できる桶を作って、そこに籾や粉製品や繊維製品を保管していました。凍結や過湿を回避するための日本海型の対応です。東海では凍結を心配しなくていいので、籠かけ土器で対応していた可能性があります。木材の持つ吸放湿性と断熱性を弥生時代や古墳時代の人々も知っていて、日本海側ではこの性質を応用したものが作られていたということです。

燃料としての木材資源

次にこんな実験をしました。復元竪穴住居に温湿度計を設置して、住居の中で薪を燃やしました。平成19年3月の温度(図2)と湿度(図3)の変化です。外気温が0度で氷点下、あるいはプラス2℃ぐらいの気候で、住居内で薪を燃やしました。9時半ぐらいから10kgの薪を燃やしますと、室温がだんだんと上がってきまして、だいたい6時間室温は10℃前後で保たれます。

次に湿度ですが、普段火を焚いてない竪穴住居では湿度が70%ぐらいあるのです。住居が長持ちするために何が必要かと言うと、一番重要なのは湿度を抑えることです。だから居住者がおらず火が焚かれない復元住居はすぐに壊れてしまうのです。火を焚くと70%ぐらいの湿度が20%以下、10%ぐらいにまで下がるのです。

弥生時代～古墳時代の人々にとっても住居の維持管理という問題の中で、火を焚くことは

暖房以外でも必要だったのでしょ。湿気の問題は他のものにも影響します。色々な道具類や薬製品、建築材もそうです。家の温湿度管理は、人間の生活器材や資源との関係でも考えなければならぬ問題だと思います。

燃料を使うことに、住居の暖房以外では食事での煮炊きがあります。1つの集落に100人くらい住んでいて、その人たちが1日2～3回調理をする。そうすると住居の数が50～100件あるような古墳時代の集落だったら、一体どれだけ薪を使うのでしょうか。現代のようにガスや電気はないですから、森林資源を利用して燃料にしている。燃料材として里山からはものすごい量の木材が消費されていたことが分かります。

さらに、^{いろり}囲炉裏の中で調理をしますと燃料が少なくて済みます。これは縄文時代からの工夫です。この炉として掘り込んだ所で火を焚くと、薪3kgぐらいで調理が出来ます。ところが平たい床だと4.2～6kgと、倍もしくは1.5倍くらいの薪を使うのですね。古墳時代になり5世紀の終わりには「かまど」が使われ始めます。このかまどというのはとても熱効率が良いのです。

実験ではコナラの薪は静かに燃えて最後はほとんどが灰になりました。ところがマツの薪は、火力は強いもののパチパチ火跳ねました。クリも火跳ねが多く、炭の状態に残る割合が非常に多かったです。こうした実験から、かまどの導入は^{いろり}囲炉裏では跳ねて危なかった木も、薪として使えるようになったことが見えてきました。また、三内丸山遺跡でクリの炭が多いということも再検証が必要になってきました。家の中で燃やした薪なのでしょうか、建築物の廃材を外で燃やしたもののなのでしょうか。炭で残る量が圧倒的に多いので、実際に薪として使用した量が反映したものだとは言えないのではないのでしょうか。

集落が長続きするためには、周囲の森が供給出来る燃料材と需要のバランスが必要です。無制限に使うわけにはいかないのですね。だから、弥生時代から古墳時代になると燃料材を抑える工夫をしています。これは美濃も越中も同じです。富山は岐阜山に比べて冬場の燃料の利用が圧倒的に多いですね。人と森との関わりということを考えますと、富山の集落は周辺の里山の規模が大きいのかも知れません。

注1「襲連紀」とは、南九州一帯から歌山までの一帯に分布する植物群を特徴づける植物要素という意味で、西南日本の植物相の帯のこと。
写真2・3・4・8は山田昌久氏提供、写真5・6・7は山田昌久編『考古資料大観8 弥生・古墳時代 木・繊維製品』小学館2003より転載しました。

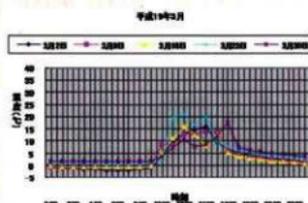


図2. 復元竪穴住居内の温度変化

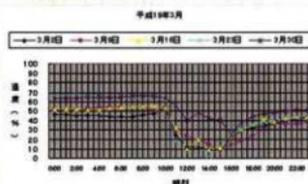


図3. 復元竪穴住居内の湿度変化

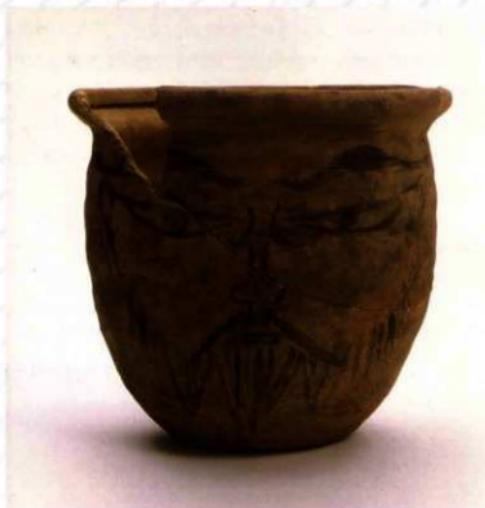
北陸と東海の 古代まじないの世界

Yuichi Horisawa 堀沢祐一

奈良大学文学部文化財学科卒。日本考古学協会員。

1993年富山市教育委員会生涯学習課学芸員。文化財保護・埋蔵文化財行政を担当。1999年富山市教育委員会埋蔵文化財センター学芸員。史跡北代遺跡の保存整備事業、任海宮田遺跡、豊田大塚・中吉原遺跡などの発掘調査を担当。

2009年から富山市教育委員会生涯学習課係長として文化財保護行政を担当。主な論文に「島をめぐる祭祀文化－韓国扶安竹幕洞祭祀遺跡について－」『富山市日本海文化研究所紀要』第16号、「越中国の律令祭祀具と官衙遺跡」『続文化財学論集』、「古代越中国の律令祭祀について」『信濃』第60巻第4号、「越中国から見た人面墨書土器」『一山典遷暦記念論集 考古学と地域社会』、「越中国の祭祀・仏教関係遺跡と遺物」『古代の越中』がある。



とよた おおつか なかよしわら じんめんぼくしよ
豊田大塚・中吉原遺跡出土人面墨書土器

木製祭祀遺物（畜串、人形等）などの律令期祭祀遺物が出土しています（表1）。

奈良・平安時代は、本国内には4郡があり、新川郡で6遺跡、婦負郡で3遺跡、射水郡で5遺跡、瀨波郡で5遺跡が確認されています。これらは、ほとんどが当時の役所に関係する遺跡（官衙遺跡）もしくは、役所に付属した祭祀場の遺跡と考えられます。ただし、越中国では、越中国府の場所以外はあくまでも推定地になります。

No.	遺跡名	郡域	所在地	時期	遺跡の種類	人形	畜串	人形	内形	鳥形	刀形	鏡形	その他	祭祀遺物出土遺跡	祭祀遺物以外の遺物など
1	豊田大塚・中吉原	新川郡	富山市	9C後半	祭祀	3	1	4						溝	書生土器
2	米野大塚	新川郡	富山市	8C末-10C初期	新川郡家園遺		29				1			井戸	埴輪陶器、灰輪陶器、書生土器、陶器類、石等
3	宮野	新川郡	富山市	9C-10C	集落		3							井戸	書生土器、石等
4	志摩宮野・志ノ木	新川郡	富山市	8C中-9C前半	水堀跡家園遺		2							井戸	書生土器、灰輪陶器、石等、土
5	じょうへのま	新川郡	入善町	8C末-10C初期	生埴野家園遺	1	1	1	1					小ピット?	埴輪陶器、灰輪陶器、書生土器、陶器類、木製土器、土器（中野の形・志野・埴野あり）
6	辻	新川郡	立山町	8C後半	川筋家園遺		2							包査跡	
7	花ノ水C	婦負郡	富山市	8C後半	集落・祭祀	1	2							溝	
8	南太山1	婦負郡	射水市（旧・石川町）	8C後半	集落・祭祀	2	30							溝	中沢水製品5・4点
9	赤田1	婦負郡		8C後半-10C前半	集落・祭祀	54	6	5	2	17	4			陶器類	埴輪陶器、書生土器、中野丸形書生土器、埴輪、陶器類、石等
10	志摩水	射水郡	射水市（旧・大島町）	8C後半-10C初期	祭祀・倉庫	5	208	26	16	4	1	5		早期陶器類	書生土器、灰輪陶器、瓦、土器、書生、出芽・習志木製
10	荒瀬	射水郡		8C後半	祭祀・倉庫	1									書生土器、円筒鏡、瓦、土器
11	原田原の水	射水郡	高岡市	8C中-10C	官衙家園遺	4					1?				灰輪陶器、書生土器、埴輪鏡、足金具、「射野」土器
12	東本津	射水郡	高岡市	8C後半-9C前半	水堀跡家園遺	63	20	1	3	1	4			早期埴輪鏡	埴輪陶器、灰輪陶器、書生土器、灰輪陶器、瓦、土器、書生、陶器、「射野」土器
13	下野野	射水郡	高岡市			ある	ある	ある	ある					土塊	書生土器
14	石巻A	射水郡	高岡市	8C-9C		ある	ある	ある							書生土器
15	中野島	福波郡	高岡市	7C中-11C後半	官衙家園遺	12	1	1	1?					武器類	水鏡・赤刀
16	麻生谷	福波郡	高岡市	8C後半-9C	川人家園遺	6								井戸	埴輪陶器、灰輪陶器、書生土器、木製
17	石丸田木寺	福波郡	小矢野町・高岡市（旧・福岡町）	7C後半-9C	集落	1								柱穴	埴輪陶器、灰輪陶器、書生土器、円筒鏡、灰輪陶器、瓦等、土器
18	築生庫	福波郡	小矢野町	7C末-8C前半	集落・祭祀	1	あり							溝	土器、土器
19	坂町	福波郡	小矢野市	7C-9C	灰輪陶器類	1								溝	書生土器、円筒鏡、書生土器、土器、水鏡

表1. 越中国の律令期祭祀遺物出土遺跡一覧

(1) 人面墨書土器 (図3)

人面墨書土器は6遺跡から約17点出土しています。出土点数は日本海沿岸諸国では最多の点数になります。どのようなところから出土しているかといいますと溝跡や川跡など水に関係するところになります。すべての遺跡で木製祭祀遺物がともなっています。

人面墨書土器の出土する時期は7世紀末～8世紀前半からで、この土器が比較的早い時期から越中国に定着していたと考えられます。その後は9世紀後半まで存続します。出土点数が最も多い時期は、8世紀後半から9世紀初頭になります。

富山市豊田大塚・中吉原遺跡の人面墨書土器を紹介いたしますと、土師器の小型甕と長胴甕があります（写真1）。小型甕は口径、器高ともに約13cmで、長胴甕は口径約20cm、器高約30cmです。これら土器は日常用の土器で、それを祭祀用に転用しています。その証拠に小型甕の底には穴があけられています。ともに顔は2面墨書きされ、顔の表現は非常に丁寧です。眉、目、鼻、口、髻な



写真1. 豊田大塚・中吉原遺跡人面墨書土器

どが描かれており、鼻の下にある人中も表現しています。2つとも顔の表情は似ているので、同じ人物が描いたと思われる。おそらく、専門の絵師によると考えています。

最近の発掘事例では、高岡市石名瀬A遺跡があります。現在のところ3点出土しています。すべて小型甕で、口径が約10cmの土器もあります。顔は3面もしくは4面描かれており、仏のような表情のものもあります。

小矢部市殖生南遺跡では1点あり(図3の1)、土師器の鉢に目らしき表現が残っています。口径約20cm、器高約10cmです。越中国で最も古い人面墨書土器になります。

また、越中国では人面が描かれない人面墨書土器=「顔のない人面墨書土器」が存在すると考えています。射水市南太閤山I遺跡では、人面墨書土器とともに平城京や長岡京など都で使用される人面墨書土器専用の土器を模倣したものがあります(図3の4)。これには人面は描かれていませんが、人面墨書土器と同じ意味合いで使用されたと考えられています。

富山市花ノ木C遺跡では、溝跡からほぼ完全な形をした土師器の甕とともに畜串・人形とともに出土しています(写真2)。これら土器には顔が描かれていませんが、人面墨書土器と同じ役割を果たしたと考えています。

(2) 木製祭祀遺物

(図4)

木製祭祀遺物は19遺跡から出土しています。祭祀遺物の内容や出土点数は、次の



写真2. 花ノ木C遺跡出土遺物

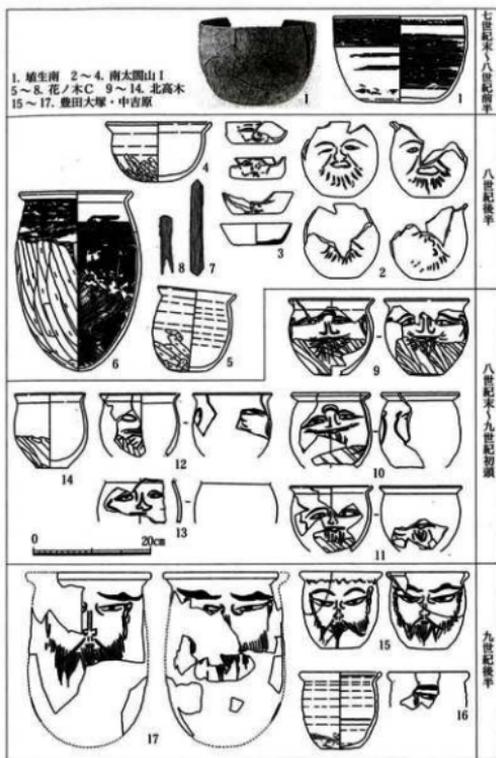


図3. 越中国の人面墨書土器と花ノ木C遺跡出土遺物

ようになります。畜串約 525 点、人形約 80 点、舟形^{フネガタ} 23 点、馬形約 12 点、鳥形 3 点、刀形 9 点、鎌形 5 点、琴形 2 点、琴柱形 2 点、陽物形 4 点です。どのようなどころから出土するかというと、溝跡、川跡、水路跡、湿地帯、井戸跡、柱穴、土坑からで、水に関係するところとそうでない場合があります。使用方法に違いがあるのでしょうか。出土する時期は 7 世紀末から 10 世紀初頭までになります。

8 世紀前半は畜串のみが出土しますが、8 世紀後半になると畜串に加えて人形、舟形、馬形、鳥形、刀形、鎌形、琴形、琴柱形、陽物形と木製祭祀遺物の種類が豊富で、出土量も増加いたします。9 世紀後半以降、出土量は減少しますが、木製祭祀遺物の種類はほぼ保たれます。ただし、この時期には、琴形・琴柱形がありません。

各遺跡から、どのような木製祭祀遺物が出土しているかといいますと、豊田大塚・中吉原遺跡では、人面墨書土器が出土している溝から人形が 4 点あります（写真 3）。A の人形は、下の方が尖っています。一本足の人形で、越中国の人形の特徴であると考えています。顔部分には眉や目、体部分には衣のような表現が墨で書かれています。この人形の裏面には「神服小年賀」と人の名前が書かれています。人名が書かれる人形は珍しく、祭祀に関係のある人物と考えられます。B の人形は乳房や陰部を表現していて女性の人形です。C の人形は眉、目、鼻、髭、口が書かれており、男性の人形になります。B と C の人形は肩のつくりや股の表現が共通しています。

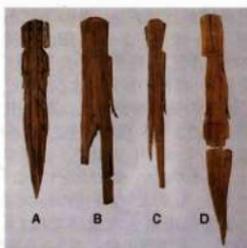


写真 3. 豊田大塚・中吉原遺跡出土人形



図 4. 越中国の主な木製祭祀遺物

高岡市東木津遺跡では、畜串、人形、馬形、刀形、琴形、琴柱形など豊富な種類の木製祭祀遺物が出土しています。ただし、ここでは人面墨書土器は出土していません。畜串は63点、人形は20点と点数も豊富です。人形の股の作り方は共通しています。マニュアル的なものがあると考えられています。下方から平行に切り込みを入れて、板を縦方向に三つに分割します。そして、真ん中の部分を途中で折り、股をコの字状に表現します。同じスタイルでほぼ同じサイズの人形と同じスタイルで違うサイズの人形があります。

射水市赤田 I 遺跡も溝跡から大量の木製祭祀遺物が出土しています。畜串 54 点、人形 6 点、舟形 5 点、馬形 3 点、刀形 4 点、陽物形 3 点になります。東木津遺跡と同様に人面墨書土器はともありません。長さ 41 cm の一本足の人形（図7の57）や鞍が表現された馬形（図7の72）、側面に穴がつけられた舟形（図7の75）などがあります。馬形や舟形はともに、人形を世界に運ぶ役割を果たしていると考えられています。

同市北高木遺跡では、溝跡から人面墨書土器と大量の木製祭祀遺物が出土しています。祭祀遺物の内容は次のとおりになります。畜串 288 点、人形 36 点、舟形 16 点、馬形 4 点、鳥形 1 点、鎌形 5 点、琴形 1 点、陽物 1 点で、越中国で最多の出土点数を誇っています。人形に興味深い事例があります。図7の49～51は、同じスタイルでサイズもほぼ同じ人形です。首のところが少し色が変わっており、何かで縛っていた痕跡が残っています。いくつかの人形を束にして溝に流したと考えられ、人形の使用法を示す事例として注目されています。同様の事例は、富山市花ノ木C遺跡でも見られ、人形の肩部分に紐状の植物質の痕跡が残っています。

越中国の律令期祭祀遺物出土遺跡の特徴

このような祭祀遺物が出土する遺跡がどのようなところに立地しているか見てみますと郡や国の境界付近にある場合が多いと考えています。

豊田大塚・中吉原遺跡は新川郡と婦負郡が射水郡の境界、南太閤山 I 遺跡と赤田 I 遺跡、花ノ木C遺跡は婦負郡と射水郡の境界、北高木遺跡・荒畑遺跡は射水郡と婦負郡の境界、東木津遺跡、下佐野遺跡、石名瀬A遺跡は射水郡と砺波郡の境界、埴生南遺跡は越中国と越前国の境界に位置していて、郡や国の境を意識した場所に祭祀場をつくっていると考えられています（図5）。

また、民俗学的に見ると、年中行事を行うひとつの場所として境界で行うことがあります。富山県の事例ですが、富山県と岐阜県の県境にある富山市東猪谷地区では、道に注連縄を張って、村に侵入してくる病気や災いを防ぐ「道切り」の風習が残っています（写真4）。注連縄には、藁が10本と3本垂らされており、「十三＝通さん」という意味があるそうです。この注連縄は地区内に3カ所設置されています。確実に県境という境界を意識した行為だと考えられます。

また、水見市では、「虫送り」の行事があります。これは害虫が発生する6月に行われていて、昭和30年代頃までは、松明を点して、太鼓を打ち鳴らし村境まで害虫を送ったそ

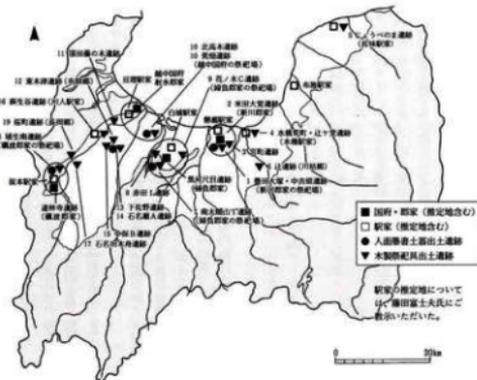


図5 越中国の律令期祭祀遺物出土遺跡と官衙遺跡

行うことができます。富山県の事例ですが、富山県と岐阜県の県境にある富山市東猪谷地区では、道に注連縄を張って、村に侵入してくる病気や災いを防ぐ「道切り」の風習が残っています（写真4）。注連縄には、藁が10本と3本垂らされており、「十三＝通さん」という意味があるそうです。この注連縄は地区内に3カ所設置されています。確実に県境という境界を意識した行為だと考えられます。

また、水見市では、「虫送り」の行事があります。これは害虫が発生する6月に行われていて、昭和30年代頃までは、松明を点して、太鼓を打ち鳴らし村境まで害虫を送ったそ

うです。また、別の地区では長さ6～7mの松明に火を点して村境まで運び、そこで松明を立てて燃やす風習が残っています。これも村境という境界を意識しています。

民俗学の事例と考古学の事例を直接結びつけるのは難しいかもしれませんが、ひとつの視点として見ていただきたいと思います。

次に出土遺構の特徴ですが、人面墨書土器や木製祭祀遺物が出土する場所は、井戸跡や土坑、柱穴もありますが、ほとんどは溝跡、川跡、水路跡、湿地帯からで、他地域の出土事例とほぼ一致します。溝跡などの幅は、3～7m程度の小規模なものが多く見受けられます。また、橋状遺構、護岸施設、堰状施設など何らかの施設がつくれる場合があります。

例えば、人面墨書土器や畜串が出土している南太閤山Ⅰ遺跡では、川跡の幅が3m前後で、長さ7mの橋状遺構が検出されています。3m前後の丸太材をぬかみに敷き並べたと報告されています。その橋状遺構から北方約13m地点で、畜串の集積が確認されています。

東木津遺跡では、大量に祭祀遺物が出土した溝跡で橋梁護岸施設が検出されています(写真5)。護岸は溝の一部で行われていて、兩岸に築かれています。左岸の護岸は、長さ1～4m、幅20～50cm、厚さ約5cmの板材を6本使用してつくられ、全長約10mになります。右岸の護岸は、2時期あります。古い段階は長さ約2.5mで板材を杭で固定してつくられています。新しい段階では溝内に南北4.3m、東西2.1mの張り出しがつくれ、その周辺をL字状に護岸しています。これら護岸を結ぶように橋が架けられていと考えられています。橋は幅1.5～2m、長さ約5mと推定されています。この施設より北側で木製祭祀遺物などが出土しています。

また、この施設から東側に2m離れたところでピットが5カ所見つかっており、門や鳥居状の構造物が建っていた可能性が指摘されています。溝跡に橋梁や護岸施設が構築され祭祀場として機能したと考えられます。

律令期祭祀遺物出土遺跡と官衙遺跡の関係(図5)

越中国では、人面墨書土器と畜串や人形などの木製祭祀遺物がセットになる祭祀パターンA型と木製祭祀遺物のみが出土する祭祀パターンB型に大きく2つに分けられます。これは、官衙遺跡の性格によって、祭祀遺物の使い分けがなされていると考えています。

祭祀パターンA型は、豊田大塚・中吉原遺跡、南太閤山Ⅰ遺跡、北高木遺跡、石名瀬A遺跡、埴生南遺跡の5遺跡があります。新川郡・婦負郡・砺波郡で1カ所ずつ、射水郡では2カ所所在しています。これら付近には、国府や郡家に比定される遺跡があり、



写真4. 道切りの注連縄



写真5. 東木津遺跡 橋梁護岸施設 (上が北)
(高岡市教育委員会「石塚・東木津遺跡調査報告書」より)

国府や郡家の祭祀場ではないかと考えています。

祭祀パターンB型は、木製祭祀遺物のみ出土する遺跡で、郡家、郷、駅家、津（河川交通）などに比定される遺跡が多いと考えられます。富山市米田大覚遺跡は新川郡家、東木津遺跡は布師郷、小矢部市桜町遺跡は長岡郷、立山町辻遺跡は川枯郷、富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡は水橋駅家、入善町じょうべのま遺跡は佐味駅家、高岡市麻生谷遺跡は川人駅家と推定されています。

越中国の律令期祭祀の特徴は、都城色の強い人面墨書土器が定着していること、「顔のない人面墨書土器」の存在すること、8世紀後半～9世紀前半に木製祭祀遺物の出土点数がピークを迎えることが挙げられます。これらのことを考慮すると越中国では国家主導のもとに律令期祭祀遺物を受け入れていたのではないかと考えています。

東海地域の祭祀遺跡と祭祀遺物

ここで、美濃国で祭祀遺物が出土している遺跡をふたつ紹介しておきます。ひとつは岐阜県可児市と御嵩町にあります柿田遺跡です。この遺跡は、当時可児郡に属していて、遺跡周辺に可児郡家があったと推定されています。

この遺跡では木製祭祀遺物が出土しています。時期は、古墳後期から中世までで、時期幅はあるのですが、主な時期は古代と考えられています。祭祀遺物の内容は、斎串30点、人形10点、馬形19点、刀形11点、舟形3点、剣形1点、鳥形1点になり、7世紀代の人形も報告されています。

出土する場所は自然の流路や溝で水に関係するところからで、水を引き入れる施設である堰も検出されています。越中国と同様に溝に何らかの施設がつくられています。

人形を見ますと、いかり肩で股部分が逆V字状になる人形となで肩で股部分がコの字状になる人形があり、企画性がうかがえます。馬形は全体のスタイルが共通していて、鞍がある場合とない場合があります（図6）。越中国と同様にマニュアル的なものがあるのだと思います。

もうひとつは、関市にある国指定史跡弥勒寺官衙遺跡群の弥勒寺西遺跡です。この遺跡群は長良川に面したところに立地し、武義郡家跡とされる弥勒寺東遺跡、郡領ムゲツ氏の氏寺弥勒寺跡、祭祀場とされ弥勒寺西遺跡からなっており、当時は武義郡に属していました。

弥勒寺西遺跡では自然の流路が検出されていて、この流路から斎串や人形、舟

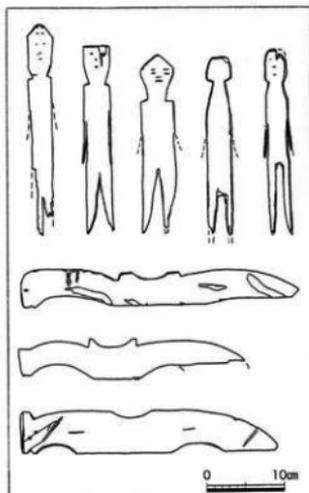


図6. 柿田遺跡の木製祭祀遺物



図7. 弥勒寺西遺跡 遺構配置図

（関市『国指定史跡 弥勒寺官衙遺跡群と弥勒寺西遺跡』より）

形などの木製祭祀遺物が出土しています。また、流路内には湧水施設や湧水を導く施設、方形の張り出しが見つられます。張り出しの背後には目隠し堀と考えられる柱の跡や篝火の痕跡もあるようです。さらに、方形の張り出しの周辺には護岸するための杭列も確認されています。祭祀を行うために空間として整備されていることがわかります(図7)。祭祀空間に何らかの施設を構築する点は、越中国と共通しています。

現在のところ美濃国では、人面墨書土器は出土しておらず、木製祭祀遺物が主体です。私が15年ほど前に人面墨書土器が出土している国を調べたことがあるのですが、その時から出土する国はあまり増加していません。そうすると国によって祭祀遺物を選択している可能性があるのかもしれませんが、それについては今後の課題です。

祭祀の内容

それでは、これまで紹介してきた人面墨書土器や木製の祭祀遺物はどのように使用されていたかお話ししたいと思います。平城京や長岡京など都では人面墨書土器は「ハラエ」に関わるものとされています。

『延喜式』の「中宮御贖」の条には、「右、晦日、卜部各著_二明衣_一、其一人執_二御麻_一、二人執_二荒世_一、二人執_二和世_一、二人執_二壺_一、宮主、史生、神部等、左右分頭前駆、次中臣官人、次御麻、次東西文部、各執_二横刀_一、次荒世、次和世、並著_二木綿鬘_一、進候_二延政門_一、大舍人叩_二門_一(中略)訖次宮主捧_二埴_一、中臣軀執授_二中臣女_一、執奉_二御_一、訖退授_二中臣_一、軀授_二宮主_一、宮主取授_二後取卜部_一、荒世事畢退出、亦中臣引_二和世_一、進退_二荒世儀_一、其荒服者賜_二卜部_一、和服者賜_二宮主_一、訖皆退出、臨_二河解除而去_一と記録されています。ちなみに、「御贖」は「御贖物」と書いて「みあがもの」もしくは「みあかも」と読まれ、身の穢れや身に降りかかる災難などを代わりに負わせて、川などに流してしまう祓いの道具のことを表しています。この文献に見られる「壺」「埴」が、人面墨書土器にあたと考えられています。しかし、これら土器に人面を墨書きすると書かれてはいません。

また、「臨_二河解除而去_一」とあることから、儀式が終わった後に土器を川に流したと考えられています。このことは、都での出土遺構のほとんどが河跡、運河跡、道路側溝で、出土する場所が文献と一致しています。

室町時代の初め14世紀前半の儀式書である『建武年中行事』にも次のように書かれています。「今日より八日、御贖物まゐる。あかちごまゐりて警蹕す。蔵人みちびく。内侍とりてまゐる。典侍、朝餉にてまゐらす。四のかはらけを、御指して上にはりたる紙に穴をあけて、御息をいるなり。御たごひ、ちいさき四足にすゑてまゐらす。御手水はうちうちまゐる。あながへ小つぼなど、台盤所にとどむ。」ここに書かれている「かわわけ」が人面墨書土器と考えられ、土器の上に紙が貼られていて、天皇がそれに穴を開けて、息を吹き込んだことがわかります。同様のことは、『東宮年中行事』にも書かれています。

これらは都での様子ですが、おそらく、越中国でも、溝跡、川跡から人面墨書土器が出土していますので、都と同じような「ハラエ」の行為が行われていたと考えられます。人面墨書土器とともに出土する人形などの木製祭祀遺物も、山形県酒田市俵田遺跡での出土事例を参考にするとも「ハラエ」にもなったものと考えられます。

人形については、『源氏物語』に「弥生月の朔日に出で来たる巳の日、「今日なむ、かく思ふことある人は、御禊したまふべき」と、なまさかしき人の聞ゆれば、海づらもゆかしうて出でたまふ。いとおろそかに、軟障ばかりを引きめぐらして、この国に通ひける陰陽師召して、祓へせさせたまふ。舟にことごとしき人形のせて流すを見たまふにも、よそへられて、知らざりし大海の原に流れきてひとかたにやはものは悲しき」と書かれています。陰陽師を呼んで、祓えをして、舟に人形を乗せて流したことがわかります。

現在も残るまじない

このような「ハラエ」の儀式は現在にも残っています。富山市内などの神社では6月下旬と12月下旬に「大祓式」を行っています。6月は「夏越の大祓」、12月は「年越の

大祓」と呼ばれています。私も小さな頃から紙の人形に名前と年齢を書いて、それで体を撫で、3回息を吹きかけていました。親からは「頭がよくなるから、頭を撫でなさい。痛いところを撫でておきなさい」と言われていました。

それでは、現在ではどのように行っているかお話しします。これは富山市ある日枝神社で行われている例ですが、神社に行きますと写真6の祓えの道具と茅の輪守(写真7)が渡されます。それを持って神社の拝殿に集まります。そこで、神職が大祓の説明を行って、大祓詞を読み上げます。その後、渡された道具を使って、自分自身でお祓いをします。

まず切麻(紙を約1cm四方に切ったもの)を自分の左肩、右肩、左肩の順番にかけます。次に人形で体を撫で、息を3回吹きかけます(写真8)。最後に小麻(割り箸の先に藁を付けたもの)を左肩、右肩、左肩につけます。お祓いが終わるとそれらをひとまとめにして、拝殿にある箱の中に入れます。人形などの祓えの道具はかつては神通川などに流しに行っていたようですが、現在は環境問題に配慮して流すことができません、燃やしているそうです。

次に「茅の輪くぐり」を行います(写真9)。神職を先頭にして、参加者は直径約2.5mの茅の輪を4回くぐります。茅の輪は水草を集めて作ったものです。8の字を描くようにして、左回り、右回りした後、もう一度左回ります。最後に、本殿に向けて、玉串(榊)を供え、二礼二拍手一礼をして儀式は終了します。いつも参加するたびに、このように古来とつながる伝統行事は大切にしていかなければならないと思っています。

今日は、越中国の古代のまじないの話をお聞かせいただきました。越中国の遺跡や歴史について少しでも関心をもっていただけたら幸いです。本日はご清聴ありがとうございました。



写真8. 人形に息を吹きかけているところ



写真6. 現在の祓えの道具
(左から小麻、切麻、人形)



写真7. 茅の輪守



写真9. 茅の輪くぐり

注(1)講演後の平成21年11月21日、高岡市下佐野遺跡の現地説明会で畜串・人形・馬形が出土していることが発表されましたので、講演時の表に加筆しています。

参考・引用文献

1. 越中・美濃 縄文のクニのすがた

橋本正 1976 『御物石器論』『大境』第6号 富山考古学会

2. 古代社会の中央と地方—重要文化財美濃国刺印須恵器を中心に

岐阜市教育委員会 1981 『老洞古陶器群発掘調査報告書』

3. 富山県における下呂石の搬入状況

朝日町教育委員会 2003 『富山県朝日町柳田遺跡発掘調査報告書』

朝日町教育委員会 2005 『富山県朝日町柳田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

石原哲彌 1995 『飛騨の地理と下呂石の動き（追稿）』『飛騨と考古学』飛騨考古学会

井口村教育委員会 1980 『富山県井口村井口遺跡発掘調査概要』

岩田 修 2003 『基調報告 石器に利用された下呂石の広がり』『第1回下呂石シンポジウム』下呂石シンポジウム実行委員会

岩田 修 2005 『下呂石と他の主な剥片石器石材の分布—特に、下呂石、黒曜石、チャート・ササカイの流通について—』『下呂石シンポジウム2005』下呂石シンポジウム実行委員会

魚津市教育委員会 1982 『富山県魚津市早月上野遺跡』

大沢町教育委員会 2000 『富山県大沢町野八木山大野遺跡発掘調査概要』

大山町 1990 『大山の歴史』

小矢部市教育委員会 1992 『富山県小矢部市臼谷岡/城北遺跡発掘調査概要』

小矢部市教育委員会 2007 『富山県小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書 縄文石器・石器編Ⅱ』

上杉町教育委員会 2004 『富山県上杉町榎楽寺遺跡発掘調査概要』

小杉町教育委員会 1986 『富山県小杉町草山B遺跡発掘調査概要』

沢田伊一郎 2001 『下呂石産地・大平遺跡の石積について』『どっこい』第67号 飛騨考古学会

庄川町教育委員会 1975 『富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査概要』

高岡市教育委員会 1988 『石塚遺跡調査概報Ⅱ』

高岡市教育委員会 2001 『石塚遺跡・東木津遺跡調査報告』

立山町教育委員会 1997 『古屋敷Ⅱ遺跡』

礪波市教育委員会 1978 『富山県礪波市榎野遺跡群予備調査概要』

富山県教育委員会 1977 『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第五次緊急発掘調査概要』

富山県教育委員会 1984 『富山県小杉町・大門町 小杉流通業務団地内遺跡群第6次緊急発掘調査概要』

富山県教育委員会 1990 『北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編5—一境A遺跡石器編』

富山県埋蔵文化財センター 2007 『早川荘作蒐集品目録』

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2009 『竹ノ内Ⅱ遺跡』

柳田遺跡 下山新遺跡 下山新遺跡発掘調査報告書』

富山県教育委員会 1997 『史跡北代遺跡発掘調査概要』

富山県教育委員会 1998 『史跡北代遺跡発掘調査概要Ⅱ』

富山県教育委員会 2000 『富山県北代西山遺跡発掘調査報告書』

富山県教育委員会 2001 『富山県関ヶ丘中山IV遺跡発掘調査報告書』

富山県教育委員会 2002A 『富山県岩瀬天神遺跡発掘調査報告書』

富山県教育委員会 2002B 『富山県関ヶ丘中山III遺跡 関ヶ丘中山IV遺跡 関ヶ丘中山V遺跡 関ヶ丘谷遺跡発掘調査報告書』

富山県教育委員会 2003A 『富山県関ヶ丘谷谷III遺跡 関ヶ丘中山I遺跡 関ヶ丘中山IV遺跡 関ヶ丘谷谷IV遺跡発掘調査報告書』

富山県教育委員会 2003B 『富山県長岡八町遺跡発掘調査報告書』

富山県教育委員会 2004 『富山県関ヶ丘谷谷II遺跡 関ヶ丘谷谷II遺跡発掘調査報告書』

富山県教育委員会 2008 『富山県八町II遺跡発掘調査報告書』

中村由克 2007 『下呂石の供給』『縄文時代の考古学6もつくり』同成社

長屋幸二 2008 『下呂石から学ぶもの』『第3回下呂石シンポジウム2008』下呂石シンポジウム実行委員会

南砺市教育委員会 2007 『矢張下島遺跡調査報告書』

西井龍徳・藤田富士夫 1976 『兵羽山丘陵周辺の先土器—縄文時代草創期の遺跡について』『大境』第6号 富山考古学会

西井龍徳 2004 『地域を越えた交流 下呂石』『利賀村史1 自然・原始・古代・中世』

水見市 2002 『水見市史7 資料編5考古』

水見市教育委員会 2006 『鞍川中B遺跡』

福光町教育委員会 1974 『富山県福光町五瀬遺跡調査概要』

福光町教育委員会 1980 『富山県福光町竹林I遺跡緊急発掘調査概要』

婦中町教育委員会 2000 『外輪野I遺跡・鏡坂I遺跡』

古川知明 2003 『神通峡の縄文遺跡について』『大境』第23号 富山考古学会

麻柄一志 1987 『富山県黒部市田家遺跡—小森次郎氏採集の資料(1)—』『大境』第11号 富山考古学会

麻柄一志 2006 『北陸地方のトロ石器』『大境』第26号 富山考古学会

麻柄一志 2006 『日本海沿岸地域における旧石器時代の研究』雄山閣

森秀典・山崎典子・川端華江 1991 『立山町神寺不動平遺跡』『大境』第13号 富山考古学会

吉朝附富 2000 『下呂石物語No.8 下呂石の流通』『下呂石物語』飛騨考古学会

4. 木製品から見た弥生・古墳時代の東海と北陸
鳥取埋蔵文化財センター 2002 『鳥取県の弥生時代資料』

山田昌久編 2003 『考古資料大観8 弥生・古墳時代木・繊維製品』小学館

5. 北陸と東海の古代まじないの世界
角川書店 1999 『古代地名大辞典—索引—資料編—』

岐阜県関市 2007 『国指定史跡赤松寺官衙遺跡群と赤松寺西遺跡』

財団法人岐阜県教育文化財団 2005 『柳田遺跡』

高岡市教育委員会 2001 『石塚遺跡・東木津遺跡調査報告書』

富山県教育委員会 1998 『富山県豊田大塚遺跡発掘調査概要』

富山県教育委員会 2006 『富山県米田大塚遺跡発掘調査報告書』

ふるさと開発研究所 2002 『富山県方言 万華鏡 130号(境界)』

水見市教育委員会 2003 『図説水見の歴史・民俗』

堀沢祐一 2007 『古代越中国の律令祭祀について』『信濃』第60巻

堀沢祐一 2009 『越中国の祭祀—仏教関係遺跡と遺物』『環日本海歴史民俗叢書13 越中の古代』高志書院

平成21年度岐阜市富山市都市間交流事業

越中と美濃を結ぶ考古展 交流のはじまり 旧石器時代～古代 記念講演録

発行日 2010年3月31日

編集/発行 富山県教育委員会 埋蔵文化財センター
〒930-0091 富山県富山市愛宕町1-2-24
TEL. 076-442-4246
URL <http://homepage2.nifty.com/kitadai/center.htm>

印刷 なかたに印刷株式会社

